

〒371 前橋市上泉町664-4
前橋市教育委員会管理部文化財保護室
TEL 0272-31-9531

柳久保遺跡群IV

1987

前橋市教育委員会
前橋市埋蔵文化財発掘調査団



柳久保遺跡群IV

—城南住宅団地内造成地区内発掘調査報告書—

1987

前橋市教育委員会
前橋市埋蔵文化財発掘調査団

序 文

前橋市は名山赤城山を北に坂東太郎で名高い利根川や萩原朔太郎をはじめ多くの詩にうたわる広瀬川が市街地を貫流し四季折々の風情にあふれ詩情豊かな県都である。

赤城山南麓、前橋台地上において縄文時代から近世・近代にかけて人々の生活の痕跡を示す遺跡・遺物が数多く存在する。

特に古墳においてはかつて市域に800余基の存在が伝えられている。その中で東国の大墳を代表する前橋天神山古墳を初め八幡山古墳、城南三二子古墳、天川・總社二子山古墳、宝塔山古墳、蛇穴山古墳等々の国指定史跡がある。また山王庵寺、上野国分寺、上野国分尼寺、上野国府が本市域西部の總社・元總社に集中して存在する。

古代において前橋の地は政治・宗教・経済文化の中心地として栄え東国の奈良ともいわれる。

中世においては戦国武将の上杉氏・武田氏・北条氏の三氏がしのぎをけざった地である。近世においては諸代大名の酒井氏・松平氏が居城した関東3大名城の一つ庭橋城があり歴史性豊かな街である。

柳久保遺跡は前橋工業団地造成組合による城南住宅団地造成に伴う事前発掘調査である。調査は昭和59年度の確認調査、昭和60年度の発掘調査に続き第3年次になり昭和62年度第4次調査で終了予定となる。

昭和61年度は第2工区を中心とした発掘調査である。調査成果として縄文時代の遺構及び包含層、奈良平安時代の住居跡、水田址調査を中心に実施し多大の成果を上げることができた。本報告書は第2工区を調査した報告書である。

本報告書を刊行するにあたり物心両面から援助・協力をいただいた前橋工業団地造成組合に厚くお礼を申し上げます。

また本発掘調査に際し、山武考古学研究所・所長をはじめ調査担当者・作業員に感謝申し上げます。

本報告書が斯学の発展のため寄与できれば幸いと存じます。

昭和62年3月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長 関口和雄

例　　言

1. 本書は前橋市荒子・荒口町に所在する城南住宅団地造成予定地における柳久保遺跡群柳久保遺跡（第10地点）、下鶴谷遺跡（第13地点、上面）、柳久保遺跡（第14・16地点）の発掘調査報告書である。
2. 調査は前橋市工業団地造成組合（管理者　清水一郎）の依頼により前橋市教育委員会指導のもと山武考古学研究所が担当した。
3. 現地調査は山武考古学研究所調査研究員千田幸生、桐谷優、肥田順一が行なった。なお下鶴谷遺跡の1号住居址は前橋市教育委員会の前原豊、関根吉晴が行なった。
4. 本書の遺物、図面の整理は千田幸生、肥田順一が行ない、石井百々子、片岡美和子、前原豊、関根吉晴、芦田和義に協力を得た。
5. 本書の編集は千田幸生、肥田順一が行ない平岡和夫が総括した。
6. 本書の執筆分担は以下の通りである。

福田紀雄 第1章

前原 豊 第5章第1節1号住居址遺物

関根吉晴 第5章第1節1号住居址造構

千田幸生 第3章第1節、第4章、第5章

肥田順一 第2章、第3章第2節、第6章

第7章のⅠは古環境研究所の杉山真二氏、Ⅱは国立科学博物館植物研究部の山内文氏に執筆していただいた。尚山内氏には炭窯出土の木炭の鑑定をしていただいた。

7. 発掘調査から本書刊行に至るまで、下記の機関、諸氏の御指導、御助言を賜った。記して感謝の意を表す次第である。

前橋市教育委員会、前橋市工業団地造成組合

凡　　例

1. 本書に使用した造構番号は現地調査において使用したものをそのまま用いた。
2. スクリントーンは造構で、焼土 ■■■ 粘土 ◉◉◉ B 軽石純層 ◉◉◉ の範囲を示し、遺物で織維土器の断面を示す。
3. 遺物断面の黒塗りは須恵器を示す。
4. 挿図中のドットは、床着の遺物を示す。
5. 遺物の写真横に付した番号は、挿図中の番号と一致し、写真を割愛した遺物の番号は欠番となっている。

目 次

本 文 目 次

序文	
例言	
凡例	
第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の位置と考古学的環境	2
第1節 位置と環境	2
第2節 周辺の遺跡	2
第3章 調査の概要	5
第1節 調査の方法	5
第2節 調査の経過	6
第4章 柳久保遺跡（第10地点）	7
第1節 遺跡の立地	7
第2節 調査の経過	7
第3節 土層	7
第4節 検出された遺構と遺物	9
第5節 まとめ	10
第5章 下鶴谷遺跡（第13地点）	11
第1節 遺跡の立地	11
第2節 調査の経過	11
第3節 土層	13
第4節 純文時代の概要	14
第5節 検出された遺構と遺物	15
第6節 まとめ	44
第6章 柳久保遺跡（第14・16地点）	45
第1節 遺跡の立地	45
第2節 調査の経過	45
第3節 土層	46
第4節 検出された遺構と遺物	47
第5節 まとめ	50
第7章 科学分析	51
I プラント・オパール分析結果	51
1 はじめに	51

2 プラント・オパール分析法（略）	51
3 試料	51
4 分析結果	51
5 考察	52
II 柳久保遺跡（第16地点）出土の果核	62

挿 図 目 次

第1図 周辺の遺跡	3
第2図 調査区設定図	折図
柳久保遺跡（第10地点）	
第3図 標準土層	7
第4図 柳久保遺跡（第10地点）全測図	8
第5図 1・2・3号土塁実測図	10
第6図 遺構外出土遺物	10
下鶴谷遺跡（第13地点）	
第7図 下鶴谷遺跡（第13地点）全測図（上面）	12
第8図 標準土層	13
第9図 下鶴谷遺跡（第13地点）全測図（下面）	14
第10図 1号住居址実測図（1）	15
第11図 1号住居址実測図（2）	16
第12図 1号住居址出土遺物（1）	17
第13図 1号住居址出土遺物（2）	18
第14図 1号住居址出土遺物（3）	19
第15図 1号住居址出土遺物（4）	20
第16図 2号住居址実測図（1）	22
第17図 2号住居址実測図（2）	23
第18図 2号住居址出土遺物	24
第19図 3号住居址実測図	25
第20図 3号住居址出土遺物	26
第21図 4号住居址実測図	27
第22図 4号住居址出土遺物	28
第23図 5号住居址実測図	29
第24図 5号住居址出土遺物	30
第25図 6号住居址実測図	32
第26図 6号住居址出土遺物	33
第27図 7号住居址実測図（1）	34
第28図 7号住居址実測図（2）	35
第29図 7号住居址出土遺物	36
第30図 8号住居址実測図	37
第31図 8号住居址出土遺物	38
第32図 1・2号土塁実測図	38
第33図 2号土塁出土遺物	39
第34図 1・2・3・4号炭窯実測図	40
第35図 5・6・7号炭窯実測図	42
柳久保遺跡（第14・16地点）	
第36図 柳久保遺跡（第14-16地点）全測図	43
第37図 標準土層	46
第38図 1・2・3・4号溝実測図	47
第39図 5・6・7・8号溝実測図	48
第40図 柳久保遺跡（第14・16地点）	49
出土遺物	
第41図 プラント・オパール標本	51
採取地点	
第42図 イネ機動細胞プラント・オバ	54
ール出現状況	
第43図 各植物の推定生産量と推移（1）	55
第44図 各植物の推定生産量と推移（2）	56
第45図 イネ機動細胞プラント・オバ	57
ールの密度の分布	
第46図 柳久保遺跡（第16地点）B区果	62
核出土状況	

図 版 目 次

柳久保遺跡(第10地点)

図版 1-1 確認全景

2 表土排土

3 1号土塁

4 2号土塁

5 3号土塁

図版 2-1 終了全景

2 先土器・縄文時代試掘坑

3 先土器・縄文時代試掘坑

4 造構外出土遺物

下鶴谷遺跡(第13地点)

図版 3-1 表土排土終了全景

2 確認全景

図版 4-1 1号住居址

2 1号住居址断面

3 1号住居址カマド

4 1号住居址カマド

図版 5-1 2号住居址

2 2号住居址遺物出土状況

3 2号住居址

4 2号住居址

5 2号住居址カマド

図版 6-1 3号住居址

2 3号住居址第1カマド

3 3号住居址第2カマド

4 4号住居址断面

5 4号住居址カマド

図版 7-1 4号住居址

2 5号住居址

図版 8-1 5号住居址断面

2 5号住居址遺物出土状況

3 5号住居址

4 5号住居址

図版 8-5 5号住居址カマド

6 5号住居址カマド

7 5号住居址カマド

8 5号住居址カマド

図版 9-1 6号住居址

2 6号住居址遺物出土状況

3 6号住居址遺物出土状況

4 6号住居址

5 6号住居址カマド

図版 10-1 7号住居址断面

2 7号住居址旧カマド

3 7号住居址新カマド

4 7号住居址新カマド

5 7号住居址

図版 11-1 7号住居址新カマド

2 8号住居址

3 8号住居址遺物出土状況

4 8号住居址遺物出土状況

5 8号住居址炭化材出土状況

図版 12-1 8号住居址

2 8号住居址カマド

3 8号住居址カマド

4 8号住居址カマド

5 8号住居址カマド

図版 13-1 1号炭窯確認

2 1号炭窯炭化材出土状況

3 1号炭窯完掘

4 2号炭窯確認

5 2号炭窯炭化材出土状況

6 2号炭窯完掘

7 3号炭窯炭化材出土状況

8 3号炭窯完掘

図版 14-1 4号炭窯炭化材出土状況

2	4号炭窯完掘	図版21-5 (第14地点) 調査風景
3	5号炭窯炭化材出土状況	6 (第14地点) 調査風景
4	5号炭窯完掘	7 (第14地点) 南側水没状況
5	6号炭窯確認	8 (第14地点) 南側水没状況
6	6号炭窯完掘	図版22-1 (第14地点) 終了全景
7	7号炭窯炭化材出土状況	2 (第16地点) 終了全景
8	7号炭窯完掘	図版23-1 (第14地点) 1号溝
図版15-1	上面終了全景	2 (第14地点) 2号溝
2	下面終了全景	3 (第14地点) 右2・左3号溝
図版16	1号住居址出土遺物 (1)	4 (第14地点) 3号溝断面
図版17	1号住居址出土遺物 (2)	5 (第14地点) 3号溝遺物出土状況
図版18	1号住居址出土遺物 (3)	6 (第14地点) 右3・左4号溝
図版19	2・3・4・5号住居址 出土遺物	7 (第14地点) 4号溝
図版20	6・7・8号住居址、2号 土塁出土遺物	図版24-1 (第14地点) 5号溝
柳久保遺跡(第14・16地点)		2 (第14地点) 6号溝
図版21-1	(第14地点) 調査前	3 (第14地点) 南側
2	(第14地点) 調査前	4 (第16地点) 土層
3	(第14地点) 調査風景	5 (第16地点) A区7号溝
4	(第14地点) 調査風景	6 (第16地点) A区8号溝断面
		7 (第16地点) B区遺物出土状況
		8 (第16地点) B区出土遺物

表 目 次

表1 遺跡地名表.....	4	表9 7号住居址出土遺物観察表.....	36
2 調査工程表.....	6	表10 8号住居址出土遺物観察表.....	38
下鶴谷遺跡(第13地点)		表11 住居址一覧表.....	43
表3 1号住居址出土遺物観察表.....	21	表12 炭窯一覧表.....	43
表4 2号住居址出土遺物観察表.....	24	柳久保遺跡(第14・16地点)	
表5 3号住居址出土遺物観察表.....	26	表13 プラントオパール定量分析結果(1)....	58
表6 4号住居址出土遺物観察表.....	28	表14 プラントオパール定量分析結果(2)....	59
表7 5号住居址出土遺物観察表.....	31	表15 プラントオパール定量分析結果(3)....	60
表8 6号住居址出土遺物観察表.....	33	表16 プラントオパール定量分析結果(4)....	61

第1章 調査に至る経緯

昭和57年12月に前橋工業団地造成組合（管理者 清水一郎）より城南住宅団地造成地内に埋蔵文化財の有無の調査依頼が前橋教育委員会にあった。そこで教育委員会は昭和58年1月末に城南住宅団地造成予定地内の遺物分布状況調査を実施した。

その結果当該地区内の台地上に濃密な遺物散布状況を確認し、谷地部分にB軽石直下の水田址が推定された。

さらに遺跡の調査範囲を把握するために試掘調査をして、より精度が高い調査計画を策定する必要があった。

試掘調査は前橋市教育委員会の指導のもと前橋市埋蔵文化財発掘調査団が実施することになった。前橋市埋蔵文化財発掘調査団は試掘調査業務を山武考古学研究所に依頼をし、昭和59年10月から昭和60年2月にかけて実施をした。

その結果遺構・遺物の集中地区と遺構の内容・性格等が把握された。試掘調査結果に基づき昭和60年度、昭和61年度、昭和62年度の調査体制、調査順序、調査場所等の調査計画が立案された。

本開発地区面積が20haに及ぶため造成計画、造成工区分けに基づき3ヶ年で市教育委員会と前橋市埋蔵文化財発掘調査団（業務実施は山武考古学研究所）が分担調査を実施する。

昭和60年度は住宅団地の第1工区を山武考古学研究所が実施し、第2工区台地の北側の一部、終末処理場建設予定地を前橋市教育委員会で実施する。

昭和61年度は第2工区の谷地部分、台地南側、北側の一部を実施する。

調査組織

団長 関口 和雄（前橋市教育委員会 教育次長）

調査指導 平岡 和夫（山武考古学研究所 所長）

大和久震平（山武考古学研究所 調査研究室長）

福田 紀雄（前橋市教育委員会 社会教育課係長）

調査担当 千田 幸生（山武考古学研究所 調査研究員）

肥田 順一（山武考古学研究所 調査研究員）

桐谷 優（山武考古学研究所 調査研究員）

発掘作業参加者

新井ヒロ子 向久沢雅造 石間こずえ 石間とく子 般島キク枝 般島奈美知 般島美枝 梅沢八重子 大沢一江 大沢光子 大塚作一 小倉いちは 小川悦子 寺野利次郎 高沼さとみ 斎藤あみ江 神沢万子 小室ハル子 高坂やす 高坂花子 高坂なみ 高坂よ子 板巻光江 佐島直子 新保勝太郎 新保永二 新保幸水 新保俊 新保富恵 新保昌子 新保まつ 新保松乃 須藤か津美 須藤なを子 須藤理志野 須藤ハツ江 田中光子 鳥山初子 内藤よし子 蜂須賀もとめ 須越うめ子 須越登 松永シマ子 真庭卯平 真庭とし 山口きく 山田由美子 横沢信子 六木本勝造 六木本もと

第2章 遺跡の位置と考古学的環境

第1節 位置と環境

柳久保遺跡群は前橋市東部の荒子町、荒口町に所在する。本遺跡群の立地する赤城山南麓は広大な裾野地形となり、関東ローム層が厚く堆積している。この緩やかな斜面を荒砥川、宮川、神沢川など多くの中小河川が南下し、樹枝状の開析谷が台地を分断して複雑な地形を形成している。

本遺跡群は勢多郡大胡町の千貫沼を水源とする宮川の中流に存在し、中央部を宮川の開析谷が南北に走る。この谷から支谷が北西に延び、深掘と呼ばれる用水が流れる。これらの谷に分断された舌状台地上に各遺跡があり、西側に蹴訪遺跡、下鶴谷遺跡、中央部に柳久保遺跡・古墳群、東側に中鶴谷遺跡、頭無遺跡が存在する。また、宮川の本・支谷には柳久保水田址推定地が存在する。

なお、昭和60年度に発掘調査を実施した第1工区（幹線道路の東側）は、城南住宅団地の造成が進み、旧状を見ることはできない。

第2節 周辺の遺跡

柳久保遺跡群周辺には、旧石器時代から近世に至る多くの遺跡が存在する。また、近年、土地改良事業や大規模な開発事業に伴なう発掘調査によって遺跡数も増加している。

旧石器時代は周辺において発掘調査の行なわれた遺跡は極めて少ない、三屋・北三木堂・牛伏・石山遺跡で尖頭器を中心とした石器が出土している。

縄文時代は草創期から後期までの遺跡が確認され、本遺跡群においても早期・前期の包含層、前期の住居址が検出されている。前期の集落は小規模なものが多く、荒砥二之塙・荒砥宮田遺跡等が知られる。中期の遺跡は荒砥二之塙・荒砥北原・荒砥源訪遺跡等、後期は上縄引・島原荒砥上川久保遺跡等が知られる。

弥生時代は荒砥前原・頭無・島原・西原遺跡等で住居址が確認されているが、大規模な集落は検出されていない。

古墳時代に入ると遺跡数が急激に増加する。前期は荒砥宮田・荒砥上之坊遺跡等の集落の他に荒砥島原・荒砥源訪・堤東遺跡等で方形周溝墓群が検出されている。中期は集落址の他に荒砥荒子・丸山遺跡で豪族居館址が発見されている。後期になると遺跡数はさらに増加し、古墳の多い群馬県下においても有数の古墳密集地域となる。また、荒砥上之坊、大室小学校校庭遺跡等で集落址が検出されている。

奈良・平安時代になると近隣した台地上に多数の集落址が出現する。周辺では頭無・荒子小

学校校庭・大久保・川龍皆戸・堤東遺跡等で集落址が検出されている。さらに、宮川流域の荒砥大日塚・荒砥洗橋・宮川・荒砥天之宮遺跡、荒砥川流域の荒砥源訪西・荒砥宮田遺跡では、集落址と共に浅間B軽石によって埋没した水田址が検出され、集落の人々の食生活を支え続けていたものと考えられる。また、上西原遺跡では基壇を有する柱穴列と溝が検出されており、本地域の発展の様子を窺うことができる。

中世では大室城、今井城などの城郭址が知られている。



第1図 周辺の遺跡

表1 遺跡地名表

No	遺跡名	概要	No	遺跡名	概要
1	柳久保遺跡群		51	荒砥原跡西遺跡	古墳前期・後期集落、奈良・平安住居、C鉄石に係る台、B鉄石下水田。
a	下越谷遺跡	先土器、縄文包含層、前期住居、奈良集落。	52	荒砥宮田遺跡	縄文前期住居、古墳前期・中期・後期集落、奈良・平安集落、B鉄石下水田。
b	柳久保遺跡	先土器、縄文包含層、古墳一平安集落、円墳。	53	東原古墳群	
c	諏訪遺跡	B鉄石下水田。	54	おとうか山古墳	円墳
d	柳久保水田址	古墳一平安集落、古墳。	55	東原遺跡	縄文前期住居、古墳後期集落、奈良・平安住居。
e	中越谷遺跡		56	宮下道路	弥生後期住居、古墳後期集落、奈良・平安集落。
2	南田遺跡	古墳中期・後期集落。	57	荒砥前田遺跡	B鉄石下水田、荒砥川の洪水平水田。
3	酒沢遺跡	古墳中期。	58	荒口前原遺跡	弥生中期・後期初期住居、平安住居。
4	八ヶ崎・須恵突跡		59	大造古墳	石笠骨藏器
5	天神風呂遺跡	縄文前期住居、古墳後期集落、奈良・平安集落。	60	荒砥下押切遺跡	古墳後期集落、奈良・平安集落。
6	山ノ上・茂木古墳	箱式石棺石室	61	荒砥中屋敷遺跡	古墳後期集落、平安集落。
7	谷津遺跡	縄文集落、古墳群、奈良・平安住居。	62	荒砥保育所遺跡	古墳後期住居
8	山崎遺跡	縄文	63	荒砥兒子遺跡	古墳時代前、古墳一平安住居。
9	寺東遺跡	古墳中期集落、溝。	64	荒砥原塚遺跡	縄文前期住居、古墳前期・中期・後期集落、奈良・平安住居。
10	三原遺跡	先土器。	65	丸山古墳群	
11	寺前遺跡	古墳中期集落、井戸、溝。	66	立野古墳群	
12	荒砥355号墳	前方後円墳	67	荒砥北原遺跡	縄文前期・中期住居、奈良・平安集落。
13	東前田北遺跡	古墳中期集落、溝。	68	鶴谷道路	古墳中期・後期集落、奈良・平安集落。
14	東原西遺跡	古墳中期集落、溝。	69	荒砥上之坊遺跡	縄文前期住居、弥生後期住居、古墳中期・後期集落、奈良・平安住居。
15	丸山遺跡	古墳中期集落、溝。奈良・平安集落。	70	荒砥大日塚遺跡	a区 古墳後期集落、奈良・平安集落。 b区 B鉄石下水田。 c区 弥生住居、古墳後期集落、B鉄石下水田。
16	新山遺跡	a・b・cの3区に分割。古墳群、方窓周溝墓、溝。	71	大日古墳群	
17	前山遺跡	縄文前期包含層、廻穴・六・溝。	72	荒砥三木堂遺跡	先土器、弥生住居、古墳前期・後期集落。
18	西原遺跡	基壇を有する柱穴式立溝、奈良・平安集落。	73	北二木堂古墳群	
19	上横佐古墳群	後期土坑墳	74	向井上土師遺跡群	古墳後期集落、平安集落。
20	西原遺跡	先土器、弥生後期住居。	75	石山遺跡	先土器
21	七ツ石遺跡	弥生後期住居	76	石山片田古墳群	
22	七ツ石古墳群		77	今井南原遺跡	縄文前期住居、古墳後期・平安集落。
23	大福寺古墳	円墳	78	南原古墳群	
24	北山遺跡	縄文草創期・前期住居、森山後期集落、奈良・平安集落。	79	川上遺跡	古墳前期・後期住居、平安集落、寺院址。
25	上堀引瀬跡	縄文早期後半・後期住居、弥生後期集落。	80	二本松遺跡	縄文中期住居、古墳前期・奈良・平安集落。
26	下堀引瀬跡	弥生後期住居	81	牛伏遺跡	先土器、縄文前期住居、古墳後期集落。
27	稻荷山遺跡	縄文前期住居	82	洞山遺跡	縄文早期・前期・中期住居。
28	伊勢山古墳群	前方後円墳、円墳10基。	83	洞山古墳群	
29	伊勢山古墳	前方後円墳	84	二之瀧遺跡	縄文前期・中期・後期住居、古墳前期。
30	久保佐戸遺跡	縄文中期包含層、弥生後期住居、古墳前期住居、奈良集落。	85	二之瀧古墳群	
31	中島古墳群		86	荒砥古墳群	古墳集落、奈良・平安住居、B鉄石下水田。
32	荒砥山古墳	前方後円墳	87	荒砥洗濯遺跡	古墳集落、奈良・平安住居、B鉄石下水田。
33	下諏訪古墳群	三二子古墳のほか10基。	88	今井神社古墳	前方後円墳。
34	三二子古墳	前方後円墳	89	今井神社古墳群	
35	中二子古墳	前方後円墳	90	吉川遺跡	古墳前期・後期集落、奈良・平安集落。
36	前二子古墳	前方後円墳	91	荒砥天之宮遺跡	古墳後期、奈良・平安住居、B鉄石下水田。
37	荒砥上諏訪遺跡	縄文早期前住居、縄文早期・中期・後期住居、古墳後期集落。	92	宮原遺跡	古墳後期、奈良・平安住居。
38	梅木遺跡	弥生後期・平安集落。古墳時代尻戻船。	93	島原遺跡	古墳前中期・後期集落、奈良・平安集落。
39	荒砥上川久保遺跡	弥生後期住居、古墳集落。	94	ツボロ古墳	円墳
40	豊田山田町井古墳群				
41	大宮小学校校庭遺跡	古墳前期住居、奈良・平安集落。			
42	荒砥五反田遺跡	古墳前期・後期集落、平安集落。			
43	阿久山古墳群	小台地の西沿に群集。			
44	川見谷口遺跡	奈良・平安住居。			
45	荒子小学校校庭遺跡	古墳後期集落、奈良集落、墳壠跡壁。			
46	柳久保遺跡	古墳集落、奈良集落。			
47	鳴東遺跡	奈良集落、方形・前方後方形圓溝墓。			
48	大久保遺跡	奈良・平安集落。			
49	荒砥諏訪遺跡	縄文中期包含層、古墳時代周溝墓。			
50	頭無遺跡	弥生中期住居、古墳後期集落、平安集落。			

第3章 調査の概要

第1節 調査の方法

今回の本調査は柳久保遺跡（第10地点）、下鶴谷遺跡（第13地点）、柳久保遺跡（第14・16地点）で、調査面積は19,253m²である。以下各遺跡ごとに記載する。

柳久保遺跡（第10地点）調査面積は720m²である。表土排土後、ジョレンにより確認精査を行なう。遺構調査と併行して2×2mの縄文包含層調査用の試掘グリッドを6ヶ所掘り下げて、遺物の有無を確認した。

下鶴谷遺跡（第13地点）調査面積は7,200m²である。分層発掘を行なった。表土排土後古墳時代以降の調査を行なった。その後縄文包含層の調査を行なった。包含層の調査は平均5cmから10cm位を5回から6回に分けて掘り下げを行なった。遺物は4×4mの小グリッドごとに全遺物の出土位置、レベルの記録につとめた。

柳久保遺跡（第14・16地点）調査面積は14地点が11,000m²の全面発掘調査。16地点が333m²のトレンチ調査である。14地点は浅間B軽石上面まで表土排土後、人力にてB軽石の除去作業を行なう。16地点は確認のトレンチ調査、プラントオバールの調査結果から、A・B 2つの調査区を設定して調査を行なった。A区は確認トレンチで検出された浅間B軽石純層より70cm下層の灰白色粘土層で検出された溝の調査を主体に行なった。トレンチは3m巾で、長さは36mである。B区はプラントオバールの調査結果から、最も水田址の可能性があると思われる地区・層を選出した。調査区は15×15mで、層序は浅間B軽石層より2層下層である。

各遺跡の調査グリッドは、公共座標を基準にして設定した。グリッドは20×20mの大グリッドを設定し、更にその中を4×4mの小グリッドに分割した。

各遺跡の調査は土層観察用の為のベルトを残して掘り下げを行ない、遺構内の充填土の観察を行なった。

遺物は基本的にすべてその出土位置を記録した。しかし、搅乱中、遺構内覆土中の細片は除外し、一括して取り上げた。

実測図は全体測量を200分の1で実測し、各遺構は20分の1で実測し、必要に応じて10分の1、40分の1を併用した。

写真の撮影は大型白黒カメラ、小型白黒カメラ、スライド用小型カメラの3台で行ない、調査の各段階での記録を行なった。尚終了写真は、バルーンと高所作業車等を利用して撮影を行なった。

第2節 調査の経過

4月18日より柳久保遺跡（第14地点）の表土排土を開始した。低湿地で湧水が多く、5月1日から6日まで西側台地縁辺部に排水溝を掘り、7日からB軽石層の掘り下げを実施した。27日までに表土排土を終了し、引き続き下鶴谷遺跡（第13地点）の表土排土を行なった。

6月も柳久保遺跡（第14地点）のB軽石層掘り下げを継続したが、中旬から梅雨に入り、調査の進度が遅くなかった。

7月に入ても柳久保遺跡（第14地点）のB軽石層掘り下げを行なったが、下旬まで梅雨が続いた、調査の進展がみられなかった。しかし、梅雨明けとともに作業員も次第に増加し、調査が順調に進みはじめた。

8月2日から柳久保遺跡（第14地点）の調査と併行して、下鶴谷遺跡（第13地点）の調査を実施した。柳久保遺跡（第14地点）の発掘作業は、8月8日までに完了し、27・28日に柳久保遺跡（第16地点）と共にプラントオーパール調査のための土壤採集を行ない、全調査を終了した。また、8月8日から9月1日まで柳久保遺跡（第10地点）の表土排土を行なった。

9月も下鶴谷遺跡（第13地点）の調査を継続したが、24日から30日まで一時中断あるいは併行して、柳久保遺跡（第10地点）の調査を実施した。

10・11月も引き続き下鶴谷遺跡（第13地点）の調査を行なった。それと併行して、11月4日から14日まで中鶴谷遺跡（第15地点）北側、15日に柳久保遺跡（第16地点）の表土排土を実施した。そして18日から柳久保遺跡（第16地点）の遺構調査に着手し、21日までに全調査を終了した。

12月5日に下鶴谷遺跡（第13地点）の調査を終了し、中鶴谷遺跡（第15地点）の調査に移った。そして24日までに図面作成を完了し、61年度の柳久保遺跡群の調査を終了した。

表2 調査工程表

	表土排土 ■■■■■ 検認 ■■■■■ 掘り下げ ■■■■■											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月			
柳久保遺跡 (第10地点)					■■■■■			■				
下鶴谷遺跡 (第13地点)			■■■■■			■■■■■						
柳久保遺跡 (第14地点)	■■■■■				■							
中鶴谷遺跡 (第15地点)							■■■■■					
柳久保遺跡 (第16地点)								■■■■■				

西 岡 市



第2図 調査区設定図

第4章 柳久保遺跡（第10地点）

第1節 遺跡の立地

本遺跡は荒砥川左岸、赤城山南麓から南へ延びる台地上に位置し、所在地は前橋市荒子町字柳久保である。標高は114mから111mで西北西から南南東側へと傾斜する。柳久保遺跡（第14地点）との比高は6mから9mである。本遺跡の南側には古墳時代から平安時代にかけての集落址である柳久保遺跡（第11地点）が存在し、同一台地上に位置する。

第2節 調査の経過

昭和61年8月7日 表土掘削を開始する。

8月13日～8月17日 盆休み。

9月1日 表土掘削を終了する。確認面は第Ⅲ層上面である。

9月24・25日 造構の検出作業を行なう。

9月26日 土塙の掘り下げ及び、縄文・先土器の試掘作業を開始する。

9月30日 造構調査及び試掘調査終了。

10月2日 終了全測図の作成。

10月7日 終了写真撮影。調査を終了する。

第3節 土層（第3図）

X90・Y65グリッド試掘坑で観察した。

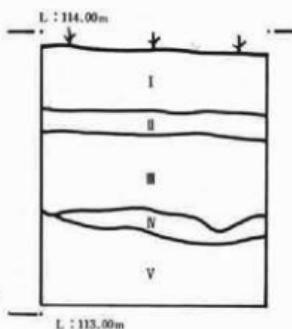
I層 暗褐色土 しまり、粘性のない耕作土。

II層 黒褐色土 浅間C軽石をやや多く含む。二ツ岳
FPを少量含み、しまり良好粘性なし。古墳時代以降の遺物包含層。

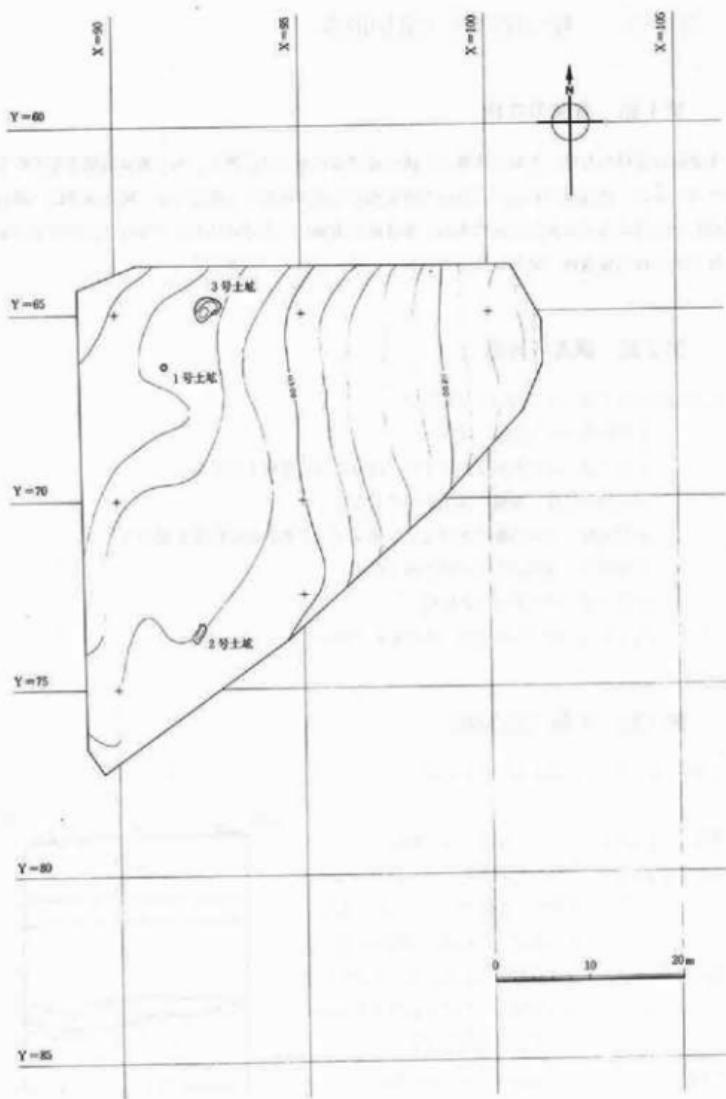
III層 棕色土 斑状に暗褐色土を含む。少量のローム粒を含み、しまり粘性ややある。
縄文時代の遺物包含層。

IV層 黄褐色土 ローム層。しまり良好粘性ややある。
径1mm以下の白色の軽石を含む。

V層 黄褐色土 ハードローム層。しまり良い。



第3図 標準土層



第4図 柳久保遺跡(第10地点)全測図

第4節 検出された遺構と遺物

本遺跡で検出された遺構は土塹3基である。覆土の状態などから1・2号土塹は古墳時代以後、3号土塹は縄文時代の所産と考えられる。

1号土塹（第5図 図版1-3）

本塹は調査区北西側X91・Y67グリッドで検出された。確認面は第Ⅲ層上面で、平面形は円形に近くなる。規模は75cm×65cmで、確認壁高は30cmである。床面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は自然堆積で、黒色土を主体とし、浅間C軽石をやや多く含む。

遺物は出土していない。

2号土塹（第5図 図版1-4）

本塹は調査区南西側X92・Y74グリッドで検出された。確認面は第Ⅲ層上面で、平面形は不整形で、主軸方向はN38°Eである。規模は215cm×65cmで、確認壁高は20cmである。床面は南北側がやや低くなり、凹凸が見られる。

覆土は自然堆積で黒色土を主体とし、浅間C軽石、二ツ岳FPを含む。

遺物は出土していない。

3号土塹（第5図 図版1-5）

本塹は調査区北西側X92・Y65グリッドで検出された。確認面は第Ⅲ層中で、平面形は梢円形を呈し、主軸方向はN68°Eである。規模は265cm×260cmで、確認壁高は110cmである。床面はやや凹凸が見られ、壁は垂直ぎみに立ち上がる。

覆土はほぼ自然堆積で、硬くしまりの良い暗褐色土を主体とする。

遺物は出土していない。

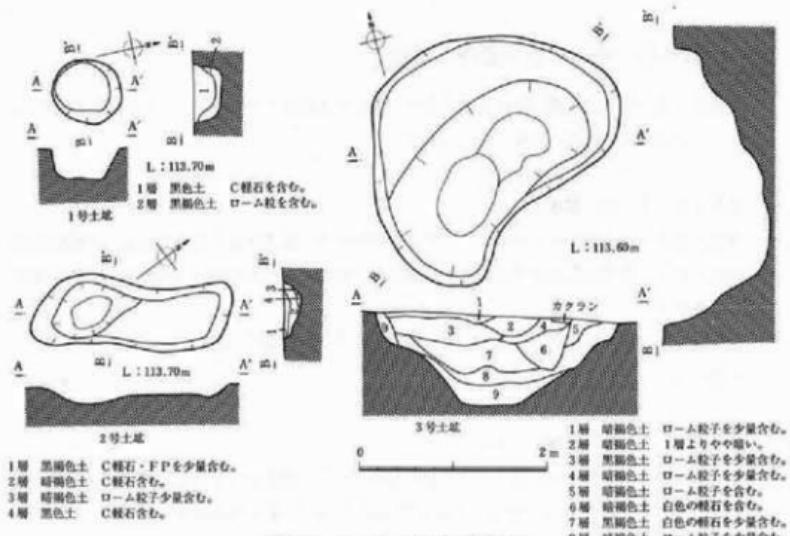
遺構外出土遺物（第6図 図版2-4）

1は先土器時代のナイフ形石器である。出土位置は本遺跡の西側の道路際の客土されたローム土中である。層位は不明。先端部欠損。側縁両面調整、基部調整を行なっている。石材はチャートである。

2から6は縄文時代の遺物で、2は石器、3から6は土器片である。

2は粗製のスクレイパー。刃部は片面加工。石材は頁岩である。

3は沈線文を施す。4・5は胎土中に纖維を含み、4は条痕文を、5は縄文を施す。6は口縁部の破片で、横位の沈線文が描かれる。



第5図 1・2・3号土塙実測図



第6図 遺構外出土遺物

第5節 まとめ

本遺跡は柳久保遺跡（第11地点）と同一台地上にあり、検出された土塙3基も、第11地点とのかかわりが強いと思われる。

遺物は先土器時代のナイフ形石器1点と縄文土器片、石器が少量出土している。先土器時代のナイフ形石器は、本遺跡縁辺からの出土である。

上面の調査と併行して先土器・縄文時代の試掘を行なった。しかし6ヶ所の試掘坑からは遺構・遺物は検出されなかった。

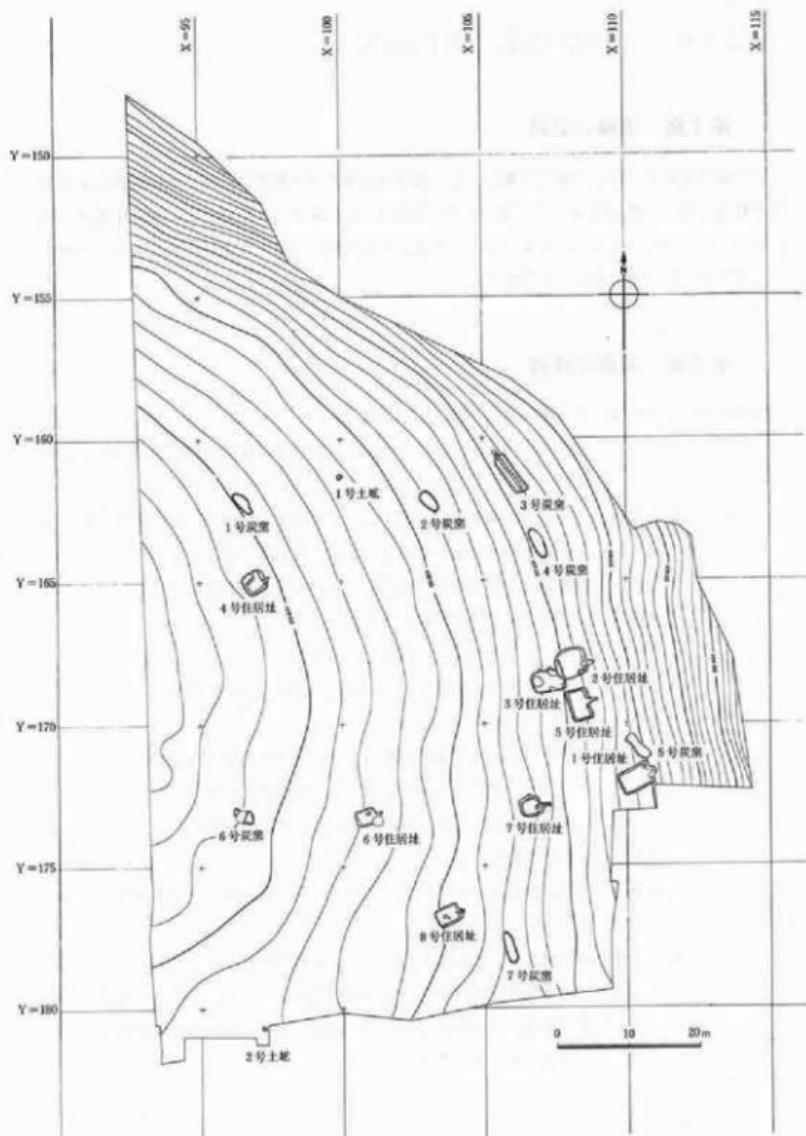
第5章 下鶴谷遺跡（第13地点）

第1節 遺跡の立地

本遺跡は荒砥川左岸、赤城山南麓から南へ延びる台地上に位置する。所在地は前橋市荒子町字下鶴谷である。標高は110mから106mで、南西側から北東側へと傾斜する。柳久保遺跡（第12地点）との比高は3mから7mである。本遺跡の北東側には柳久保遺跡（第12地点）を隔てて、柳久保遺跡（第11地点）が存在する。

第2節 調査の経過

- 昭和61年 5月27日 表土掘削開始。確認面は第II'層上面である。
- 6月7日 表土掘削終了。住居址、炭窯を検出。共に確認面に浅間B軽石が認められた。
- 8月2日～8月18日 遺構確認作業を行なう。遺構は住居址7軒、炭窯7基、土塙多数である。土塙はほとんどが近世以降の搅乱と思われる。
- 8月19日 遺構調査を開始する。炭窯、土塙の掘り下げを行なう。
- 8月25日 住居址の掘り下げを開始する。
- 8月26日 炭窯7基、土塙1基の調査を終了する。
- 8月29日 住居址の調査と併行して、縄文包含層の調査を開始する。
- 9月11日 住居址の調査を終了する。
- 10月7日 バルーンによる空撮を行なう。上面の調査を終了する。
- 10月8日～12月5日 縄文包含層の調査及び遺構調査を行なう。
- 南西側を中心に遺構、遺物が集中して検出された。
- 11月25日 下面の空撮を行なう。
- 11月26日 土層観察用のベルトの取りはずし、及び南西側の一部未掘部分の掘り下げを行なう。
- 12月2日 南西側より古墳時代前期の土塙1基を検出。調査を行なう。
- 12月5日 下面の調査を終了する。縄文時代早期から中期にかけての土器片、石器。早期から前期にかけての住居址、土塙、集石等を検出する。
- 下鶴谷遺跡の調査をすべて終了する。



第7図 下鶴谷遺跡（第13地点）全測図（上面）

第3節 土層（第8図）

本遺跡では上下二面の調査を行なった。古墳時代以降（上面）の確認面はⅡ'層上面で、縄文時代の包含層及び遺構確認面はⅢ層中である。

Ⅰ層 暗褐色土 耕作土。しまり、粘性なし。

Ⅱ層 黒色土 浅間C軽石をやや多く含む。二ツ岳FPを少量含み、しまり良く粘性ない。

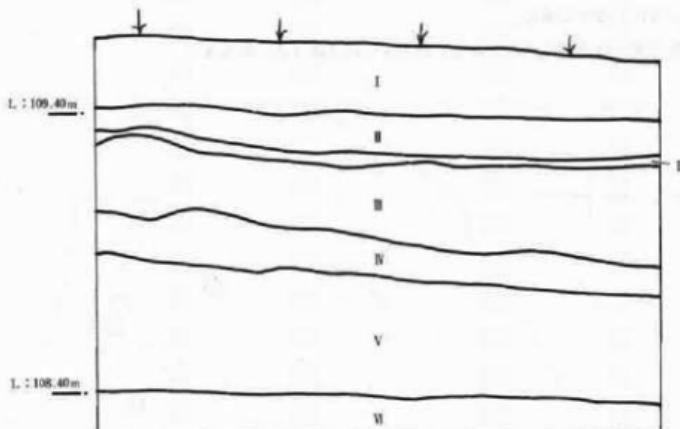
Ⅱ'層 暗褐色土 浅間C軽石を少量含む。しまりややあり、粘性あまりない。

Ⅲ層 暗褐色土 斑状に暗褐色土を含む。少量のローム粒、ブロックを含む。しまり良く粘性ややある。

Ⅳ層 黄褐色土 ローム層。しまり良く粘性ややある。径1mm以下の白色の軽石を少量含む。

Ⅴ層 黄褐色土 ハードローム層。

VI層 暗褐色土 しまり粘性ある。



第8図 標準土層

第4節 繩文時代の概要

本遺跡では古墳時代以降の調査を行なった後、繩文時代の遺物包含層の掘り下げを行なった。包含層はⅡ層上面まで、約30cmから50cmである。掘り下げは数回に分けて行なった。1回目の掘り下げで、遺物がほとんど出土しなかった北側斜面約12.00m²を調査から除外した。

その結果、住居址6軒、土塁35基、集石2基、早期から中期までの遺物が検出された。

住居址は花積下層式期3軒と諸磯a式期3軒に分かれる。花積下層式期の住居址は隅丸方形を呈する。柱穴にはバラツキがある。炉址は1軒で検出されている。遺物は石器の剥片が多く、土器片は少ない。2軒の住居址からは尖底土器が検出されており、又貝殻条痕文を残すものもあり、早期末から前期への移行期の土器であろうか。

諸磯a式期の3軒は方形もしくは不整方形を呈し、埋甕を有する。柱穴は2軒で4本の主柱穴が確認された。

土塁は階し穴状のもの、貯藏穴状のもの、浅い皿状のものなどがある。

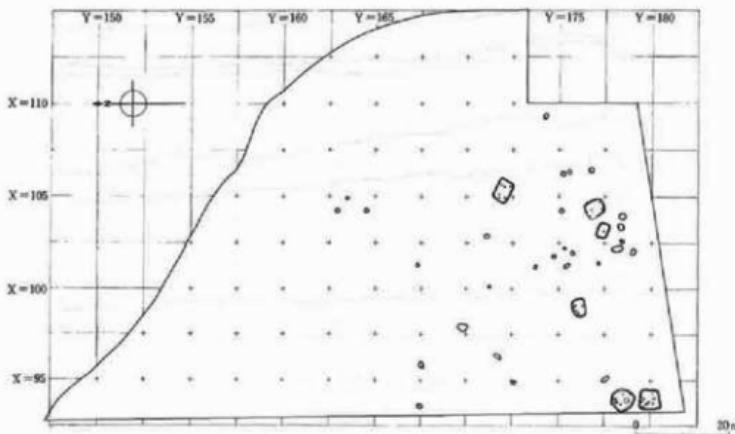
集石は1基は円形の掘り込みで上面に石が集中し、他は石が散乱しており、掘込みはない。

土塁、集石からは、鶴ヶ島台式土器、花積下層式土器、諸磯a式土器が検出されている。

包含層出土遺物は早期撲条文土器、捺円押型文土器、条痕文系土器、前期花積下層式土器、諸磯a式土器、中期加曾利E式土器である。

石器は石鎌、石匙、打製石斧、石皿、磨石等が検出されている。石質は黒曜石、チャート、頁岩、安山岩などである。

遺物の集中は南側に認められる。出土量では諸磯a式が最も多い。



第9図 下鶴ヶ谷遺跡（第13地点）全測図（下面）

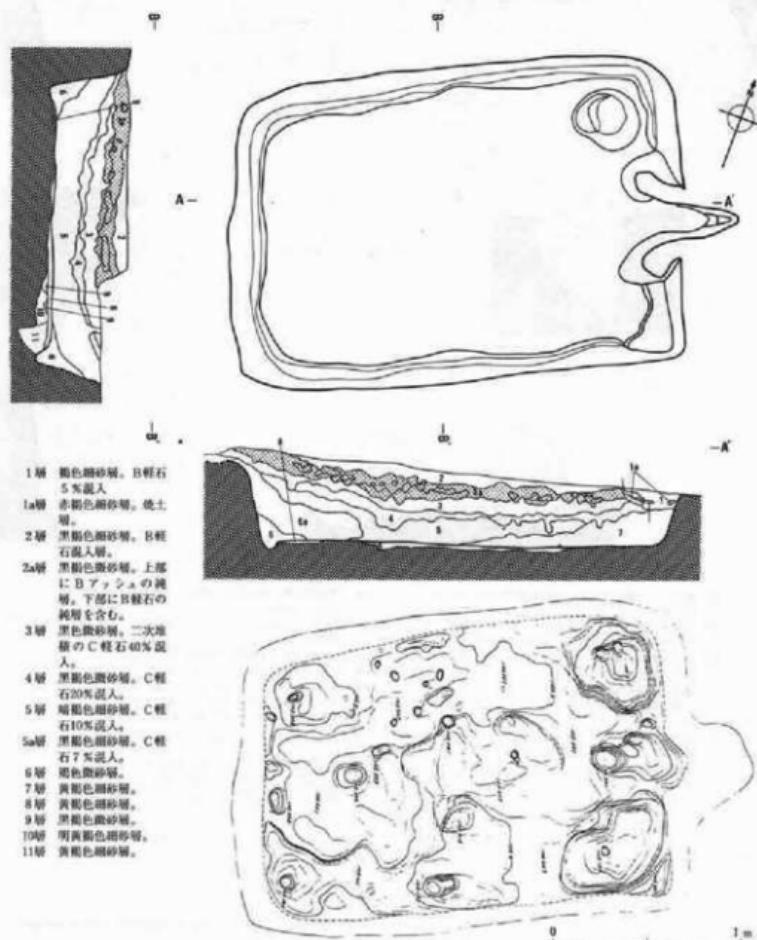
第5節 検出された遺構と遺物

本遺跡の上面で検出された遺構は住居址8軒、炭窯7基、土壙2基である。

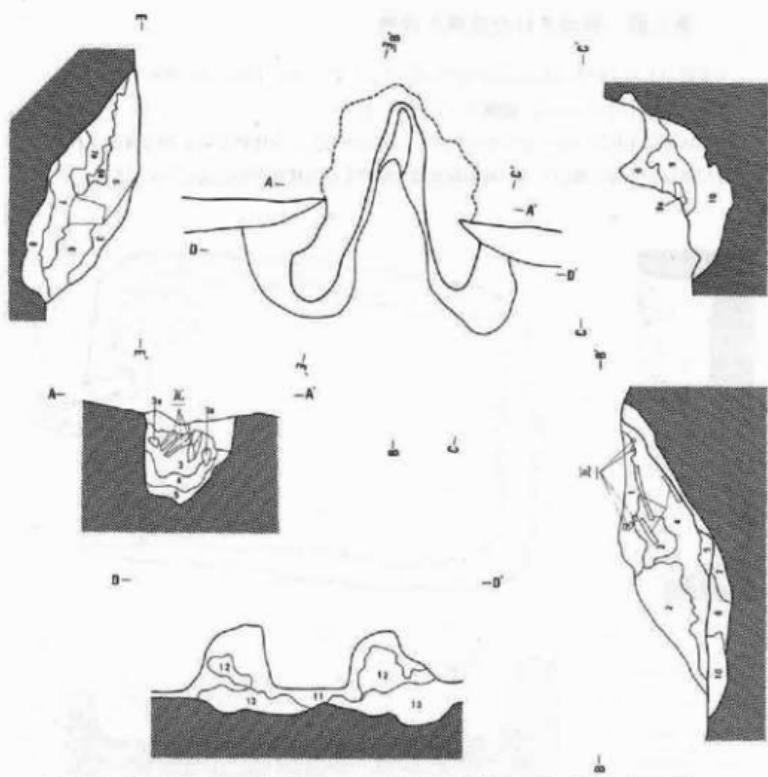
1号住居址（第10～15図 図版4・16～18 表3）

本住居址はX109～110・Y171～173グリッドに所在し、全体層序第II'層で確認された。

住居址はやや東に傾斜する台地の最東端に位置し、沖積面との比高は5mである。



第10図 1号住居址実測図(1)

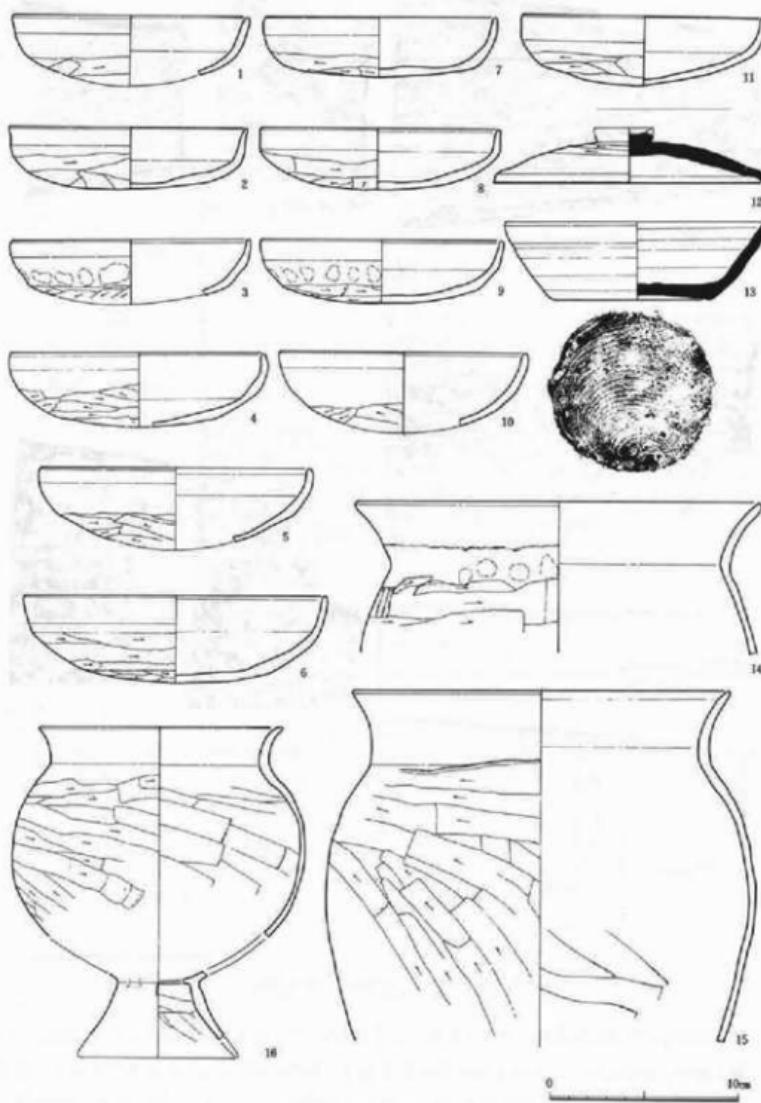


- 1層 細オーリーブ褐色細砂層。B輕石を多量に含む。粘性、締まり共になし。
 2層 褐色細砂層。ローム土を主体とする。下部に燒土、炭化物を含む。粘性あり。締まりややあり。
 3層 明赤褐色細砂層。燒土ブロック（厚さ3cm）が15%混入する層。
 3a層 明赤褐色細砂層。燒土化したロームブロック層。
 4層 褐色細砂層。燒土と黒色土が混じた層。粘性あり。締まりややあり。
 5層 褐色細砂層。黒色土（70%以上）を主体とする層。粘性やや有し締まっている。
 6層 明赤褐色細砂層。カット左袖部で最も抜けている層。

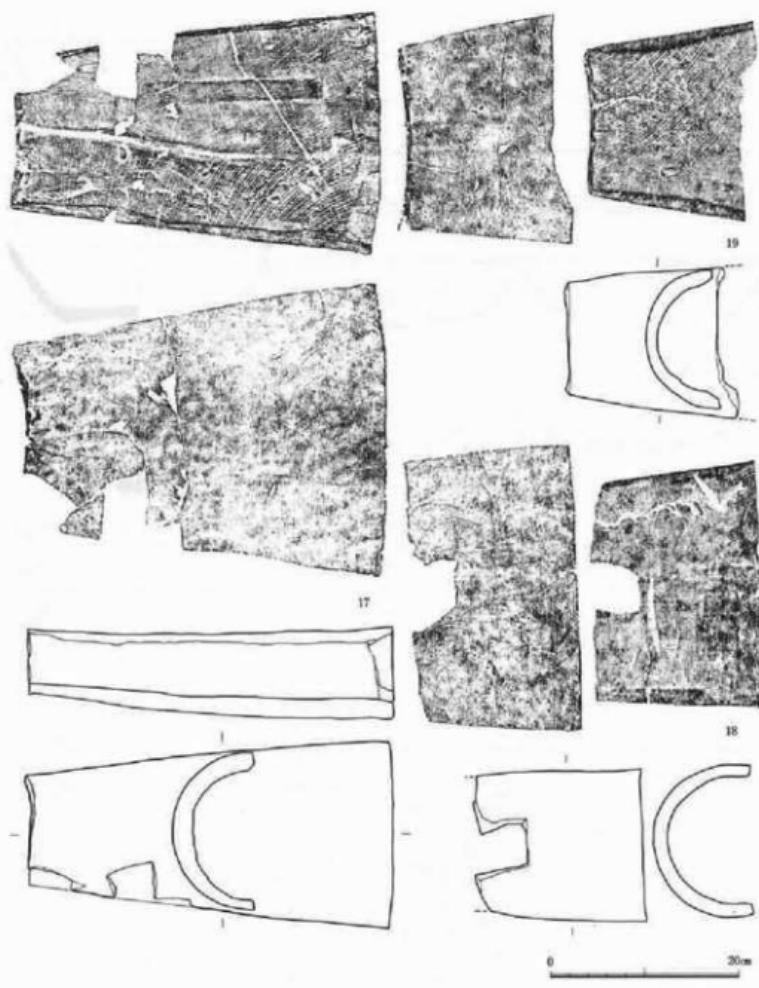
- 6a層 明黄褐色細砂層。上部に燒土を含む。約1mmの輕石を5%含む。
 7層 明黄褐色細砂層。上部に燒土を含む。約1~2mmの輕石を10%含む。
 7a層 にぶい黃褐色細砂層。約1mmの輕石を15%含む。
 8層 明黄褐色細砂層。約1~2mmの輕石を2%含む。
 9層 黄褐色細砂層。約1mmの輕石を2%含む。
 9a層 黄褐色細砂層。燒土を少量含む。締まりは良い。
 10層 黄褐色細砂層。ブロック状の燒土を5%含む。
 11層 明赤褐色細砂層。燒土層。締まりは良いが粘性はない。
 12層 黄褐色細砂層。約1~5mmの輕石2%含む。
 13層 黄褐色細砂層。右袖部に炭化物、燒土が含まれる。締まりは良いが粘性はない。

0 1 m

第11図 1号住居址実測図(2)

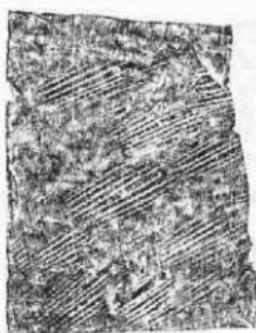


第12图 1号住居址出土遗物



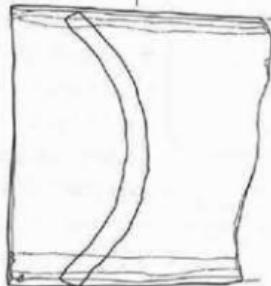
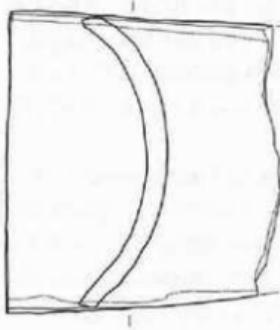
第13図 1号住居址出土遺物(2)

本住居址の平面形は東壁にカマドを有し、東西方向に長い楕形隅丸長方形の住居である。短軸3.42m、長軸4.84m、主軸方向はN 64°Eである。また面積は15.2m²の大きさを示す。確認からの壁高は西から東へ地形が傾斜しているため西壁の方が深い。最大壁高（北西隅）103.5cm、最小壁高（南東隅）49.5cmで平均約72cmと深い。壁の立ち上がりは平均105°で最大



20

21



0

20cm

第14図 1号住居址出土遺物(3)

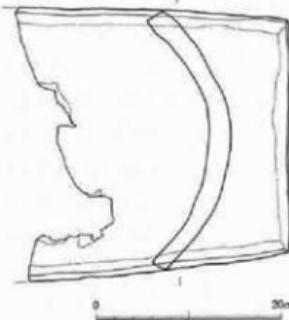
107.5°を示し、東壁を除き明瞭に検出できた。不明瞭な東壁からはカマドの右側に棚状施設が検出された。棚状施設の床面からの高さは平均約5cm、長さ74cm、幅はカマド右で25cm、南壁で50cmである。その他、生活面での調査においてはカマドの左側に貯蔵穴1基と周溝が検出された。

本住居址の覆土は大まかに見て7層に分けられた。1～2層にはB軽石が含まれていた。特にスクリーントーンで示した。2-a層には、Bアッシュ、B軽石の純層がブロック状に混入していた。3～7層においては、C軽石の混入が見られた。

住居の床面は、荒掘りが部分的になされているため、貼り床も均一的でなく南壁付近に顯著に認められた。その厚さは、4～10cmの盛り土が見られた。貼り床により床面は、ほぼ水平に形成されており、床下掘り下げの結果床下土坑が1基とビ



22



第15図 1号住居址出土遺物(4)

ト1個が検出された。床下土坑は南東隅に位置し、ほぼ円形の形をしている。床下のピットは南壁のほぼ中央に位置する。

カマド 本住居址のカマドは東壁のほぼ中央に位置し、主軸方向はN 68°Eを示す。全長128cm、最大幅145cm、煙道部長31cm、煙道部幅25cm、燃焼部幅39cm、炊き口幅37cmである。煙道部立ち上がり角は36°である。また、カマドの内壁の断面は「U」字形を呈し、良く焼けていたがカマドの支脚として利用されたと思われる物は確認できなかった。カマドの両袖は60cm程住居内に突出している。その両袖の構築材としては粘土が使用されていた。その他カマドの構築材として、平瓦や丸瓦が使用されていた。検出された瓦は、平瓦が3枚、丸瓦が3枚の合計6枚である。その他、若干小片が出土した。検出状況により、平瓦は袖部や燃焼部を高架するように用い、丸瓦は煙道部に使用するという工夫がなされたものと推測される。また、火床面は平坦であり、多量の焼土が検出されたことや灰層が見られたことから、使用頻度が高かったものと推測される。

出土遺物

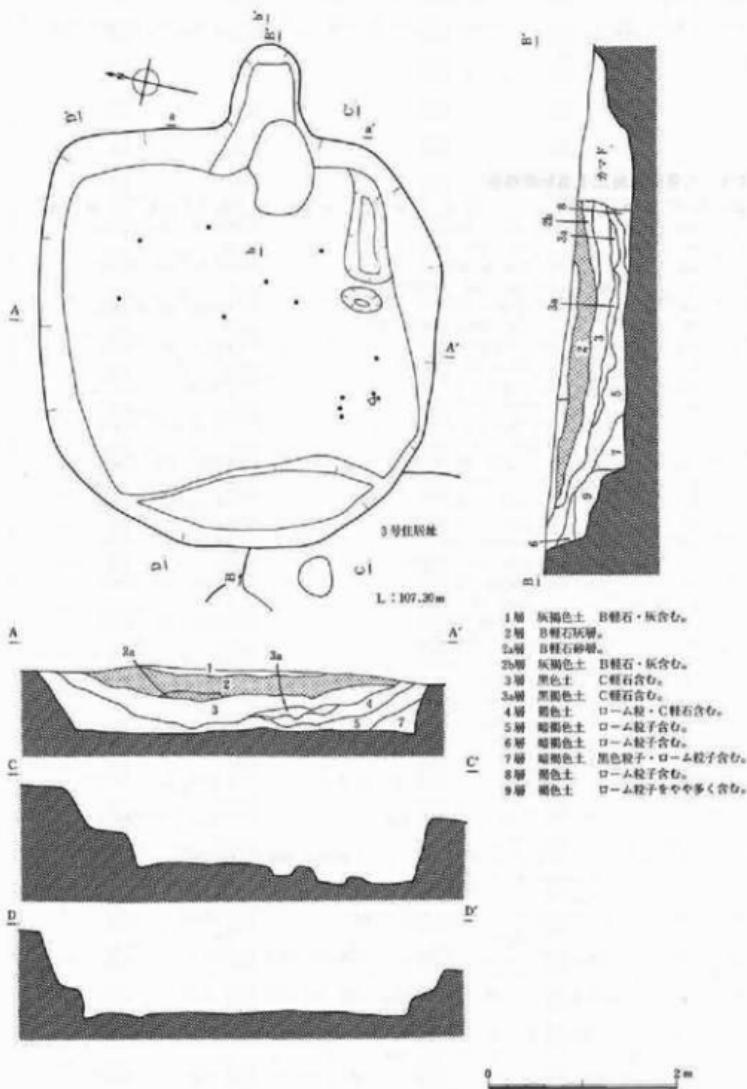
本住居址から出土した遺物は総数1261点を数える。このうち復元でき実測できたものは總て図示した。内訳は長甕2個、小形台付甕1個、壺1個、須恵器杯蓋1個、須恵器杯1個、丸瓦3枚、平瓦3枚である。これらの遺物は瓦がカマドの構築材として用いられていたほかは、カマド前面の東壁に集中する傾向が見られた。2、8、13を除くほとんどが小破片の状態で見つかっており、接合するものは少なかった。

壺類は、丸底気味の底部から偏平化傾向が認められ、口縁に横撫でがなされ、下に撫でが入り、体部下半にヘラ削りが用いられる。長甕類は器肉が薄く、ヘラ削りも胴部の上部に横方向、その下は縦方向に施される。口縁には明瞭な接合帯を残しやや屈曲する段も認められ、「コ」の字口縁に変化する直前の甕と考えられる。また、小形台付甕もやや偏平な胴部となり、脚部も短く長甕に呼応する形態を有する。これらの土器は、市内芳賀東部遺跡群II-297号住

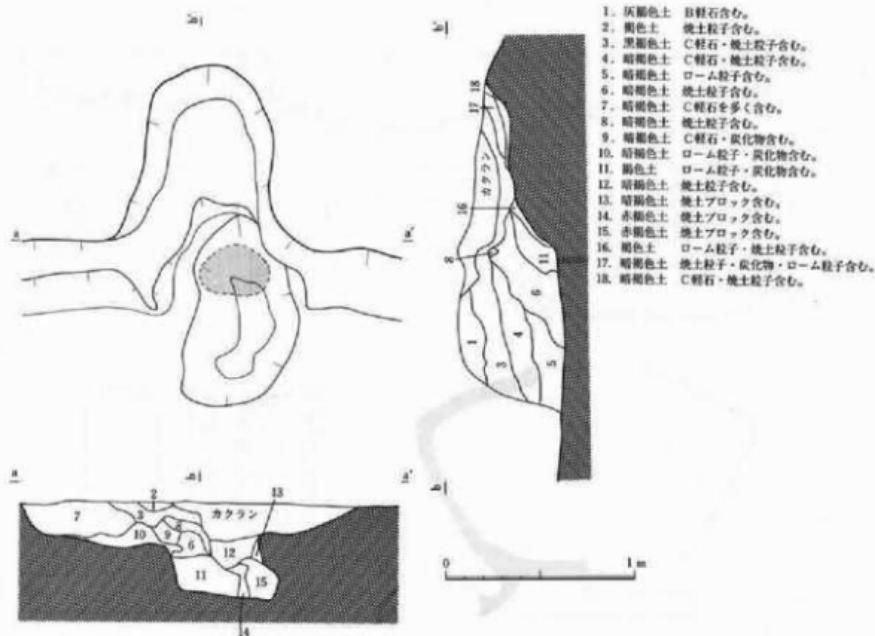
居址例と対比ができ、それらの年代観によれば9世紀第1四半期に位置づけられる。しかし、カマドの袖が住居内に突出する点や縱長方形で深い掘り込みの住居形態は古い様相と考えられる。

表3 1号住居址出土遺物観察表

番号	器 形	遺存段	法縦(cm)	器 形・成・算 形 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
1	土師 杯	1/4	口径 12.4	口縁部短く外反。 外腹へラ削り。内面ナデ。	黒雲母合 む。	良好	棕褐色	
2	土師 杯	完形	口径 13.7	口縁部短く屈曲。 外腹へラ削り。内面ナデ。	黒雲母合 む。	良好	棕褐色	
3	土師 杯	1/4	口径 13.6	口縁部短く直立。 外腹へラ削り。内面窓压、ナデ。	黒雲母合 む。	良好	棕褐色	
4	土師 杯	1/3	口径 13.4	口縁部短く内湾。 外腹へラ削り。内面ナデ。	黒雲母合 む。	良好	棕褐色	
5	土師 杯	1/4	口径 14.4	口縁部短く直立。 外腹へラ削り。内面ナデ。	黒雲母合 む。	良好	棕褐色	
6	土師 杯	3/4	口径 16.0 器高 4.7	口縁部短く外反。 外腹へラ削り。内面ナデ。	黒雲母合 む。	良好	棕褐色	
7	土師 杯	1/2	口径 13.2 器高 3.2	口縁部短く外反。 外腹へラ削り。内面ナデ。	黒雲母合 む。	良好	棕褐色	
8	土師 杯	完形	口径 12.7 器高 3.8	口縁部短く直立。 外腹へラ削り。内面ナデ。	黒雲母合 む。	良好	棕褐色	
9	土師 杯	1/2	口径 13.0 器高 3.4	口縁部短く外反。 外腹へラ削り。内面窓压、ナデ。	黒雲母合 む。	良好	棕褐色	
10	土師 杯	1/4	口径 13.0	口縁部短く外反。 外腹へラ削り。内面ナデ。	黒雲母合 む。	良好	棕褐色	
11	土師 杯	2/3	口径 12.8 器高 3.7	口縁部短く外反。 外腹へラ削り。内面ナデ。	黒雲母合 む。	良好	棕褐色	
12	須恵 杯蓋	3/4	口径 14.4	上平側板へラ切り。 ロクロ成形。	石英粒合 む。	良好	灰白	
13	須恵 杯	完形	口径 14.0 器高 4.2	器内厚い。底部斜削れ切り。 ロクロ成形。	黑色藍物 含む。	良好	灰白	
14	土師 甕	1/7	口径 21.5	口縁部「く」の字状に外反。器内薄い。 外腹へラ削り。	黒雲母合 む。	良好	棕褐色	
15	土師 甕	1/3	口径 20.0	口縁部「く」の字状に外反。器内薄い。 外腹へラ削り。	黑色藍物 含む。	良好	黄棕褐色	
16	土師 台付甕	1/4	口径 13.0	口縁部「く」の字状に外反。 外腹へラ削り。	黑色藍物 含む。	良好	棕褐色	
17	丸瓦	完形	全長 39.1 広幅端 19.8 狭幅端 11.6	行基式丸瓦。粘土板つくり。凸面横方向ナゲ調整。 横骨板。	白色藍物 含む。		灰色	
18	丸瓦	1/2	広幅端 15.9	ひもづくり。凸面横方向ナゲ調整。 横骨板。	白色藍物 含む。		灰色	
19	丸瓦	1/2	狭幅端 11.7	行基式丸瓦。粘土板つくり。凸面横方向ナゲ調整。	白色藍物 含む。		灰色	
20	平瓦	2/3	広幅端 32.3	凸面端たたき。凹面縦方向ナゲ調整。両面に余切り底、 4分割つくり。凹面広端間にヘラで「三」の記号。	黑色藍物 含む。		棕褐色	
21	平瓦	2/3	広幅端 30.3	凸面端たたき。凹面縦方向ナゲ調整。両面に余切り底、 4分割つくり。凹面広端間にヘラで「三」の記号。	黑色藍物 含む。		棕褐色	
22	平瓦	2/3	狭幅端 25.2	凸面端たたき。凹面縦方向ナゲ調整。両面に余切り底、 4分割つくり。	黑色藍物 含む。		棕褐色	



第16図 2号住居址実測図(1)



2号住居址 (第16~18図 図版5・19 表4)

本址は調査区東側X107・108 Y167・168グリッドで検出された。主軸方向はN76°Eである。規模は長軸447cm、短軸425cmで方形を呈する。西側の段を有する部分は、壁の上部が崩壊したと思われる。

確認面は第Ⅱ層上面で、壁高は64cmである。壁はなだらかに立ち上がり、床面は全体に踏み固めが認められるが、顯著ではない。

覆土は上層にB軽石純層が10cmから20cm前後堆積している。中層以下はC軽石を含む、黒色土、黒褐色土を基調とし自然堆積を示す。西壁の崩壊はB軽石降下以前第5層の堆積時にはすでに生じていた。

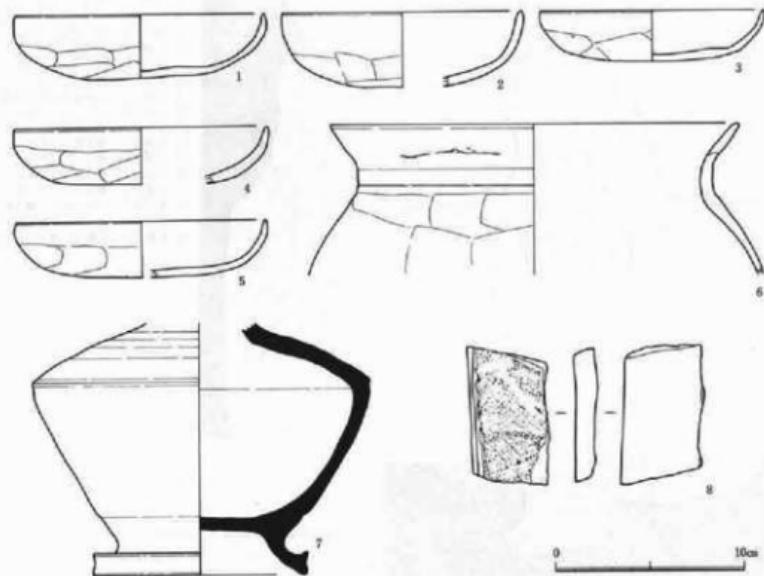
周溝は検出されていない。

ピットは2基検出されているが、いずれも浅い。

カマド 東壁中央で検出された。袖は遺存が悪い。煙道部の壁外への掘り込みは約1mである。支脚は検出されていない。

遺物は土師器の甕・壺が少量出土している。また壁外からであるが須恵器の長頸壺がカマドの東側約30cm程の所から出土している。

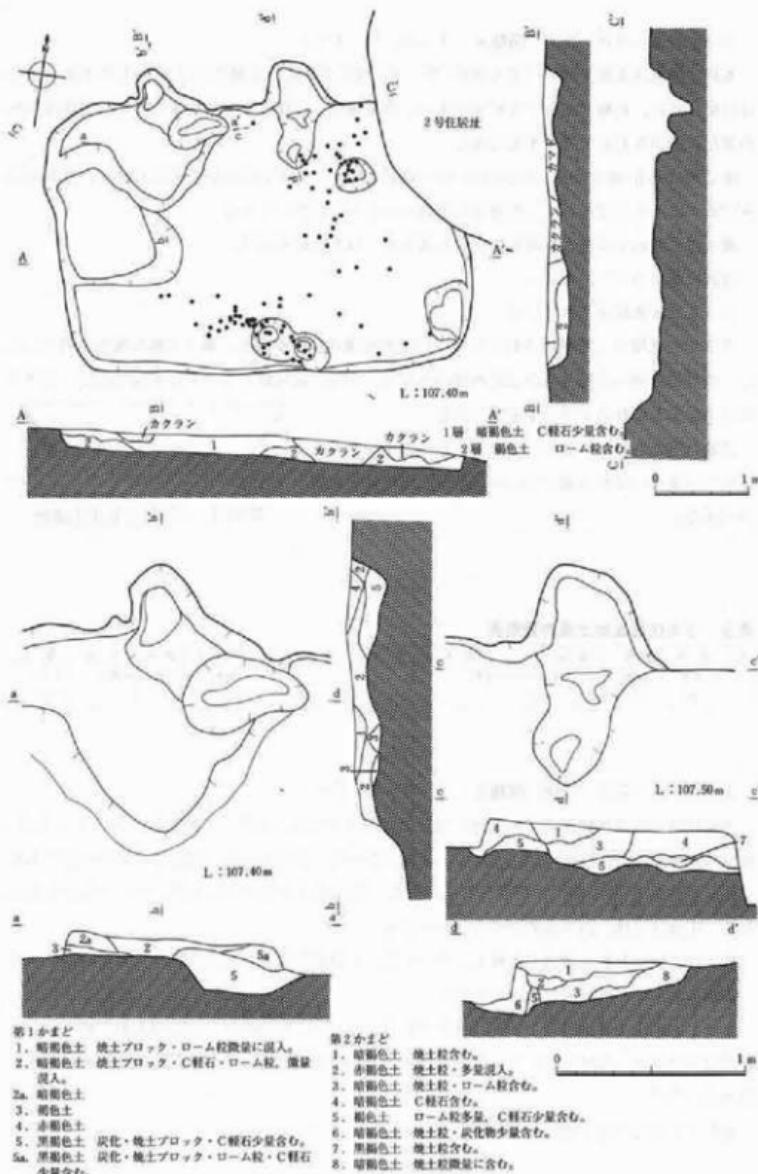
1. 黒褐色土 B軽石含む。
2. 褐色土 残土粒子含む。
3. 黒褐色土 C軽石・残土粒子含む。
4. 黑褐色土 C軽石・残土粒子含む。
5. 黑褐色土 ローム粒子含む。
6. 黑褐色土 残土粒子含む。
7. 黑褐色土 C軽石を多く含む。
8. 黑褐色土 残土粒子含む。
9. 黑褐色土 C軽石・炭化物含む。
10. 黑褐色土 ローム粒子・炭化物含む。
11. 褐色土 ローム粒子・炭化物含む。
12. 黑褐色土 残土粒子含む。
13. 黑褐色土 残土ブロック含む。
14. 褐色土 残土ブロック含む。
15. 黑褐色土 地上ブロック含む。
16. 褐色土 ローム粒子・残土粒子含む。
17. 黑褐色土 残土粒子・炭化物・ローム粒子含む。
18. 黑褐色土 C軽石・残土粒子含む。



第18図 2号住居址出土遺物

表4 2号住居址出土遺物観察表

番号	器 形	遺存度	法量(cm)	器 形、成・整 形 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
1	土師 环	口径 2/3	13.4 3.4	外面へラ削り。 内面ナデ。	緻密	良好	棕褐色	
2	土師 环	1/4	12.8 4.0	外面へラ削り。 内面ナデ。	緻密	良好	棕褐色	
3	土師 环	1/4	12.0 2.7	外面へラ削り。 内面ナデ。	緻密	良好	褐 色	カマド出 土。
4	土師 环	1/5	13.6 3.0	外面へラ削り。 内面ナデ。	緻密	良好	棕褐色	
5	土師 环	1/3	13.4 3.0	外面へラ削り。 内面ナデ。	緻密	良好	棕褐色	
6	土師 甕	口径	21.8	口縁部外反する。 外側側方向へのラ削り。内面ナデ。	砂粒を含 む。	良好	棕褐色	
7	須恵 眞溜甕	底径大 底径	13.4 11.4	底部強く締を持つ。底盤凹板へラ削り。 須端、高台部接合部。	石粒を少 量含む。	良好	灰 色	住居址外 カマド付 近出土。
8	平瓦	一部のみ	不 明	春日	石粒を少 量含む。	やや不 良	灰 色	小破片。 丸瓦の可 能性あり。



第19図 3号住居址実測図

3号住居址（第19・20回 図版6-1-3、19 表5）

本址は調査区東側X106・107Y168グリッドで検出された。主軸方向はN 8°Eである。規模は長軸4.32m、短軸2.89mで方形を呈する。北東側で2号住居址と重複する。新旧関係は本址の遺存状態がきわめて悪く不明である。

確認面は第II層上面で、壁高は最大で36cmである。壁はなだらかに立ち上がり、床面は踏み固めがほとんど見られず、西側から東側へいくぶん傾斜している。

覆土はC軽石を少量含む暗褐色土を基調とし、自然堆積を示す。

周溝は検出されていない。

ピットは4基検出されている。

カマド・北壁で2基検出されている。いずれも遺存状態が悪く、袖・支脚は検出されていない。煙道の壁外への掘り込みは北西側のカマドが30cm、北東側のカマドが40cmである。充填土は焼土粒子とC軽石を共に少量ずつ含む。

遺物は土師器の壺、甕片、須恵器の壺片がやや多く出土しているがいずれも細片で、図化し得た遺物は1点のみである。



第20回 3号住居址出土遺物

表5 3号住居址出土遺物観察表

番号	器 形	出発地	法量(cm)	器 形、成・整 形 の 特 徴		胎 土	燒 成	色 調	備 考
				口縁部	口径				
1	須恵 壺 片	口縁部 1/3	14.0 器高 —	ロクロ成形。		緻密	良好	灰褐色	第1カマ ド出土。

4号住居址（第21・22回 図版6-4・5、19 表6）

本址は調査区北西側X96・97Y164・165グリッドで検出された。主軸方向はN 53°Eである。規模は長軸3.15m、短軸2.18mである。北側に張り出しが認められ、北西側は壁の崩落である。

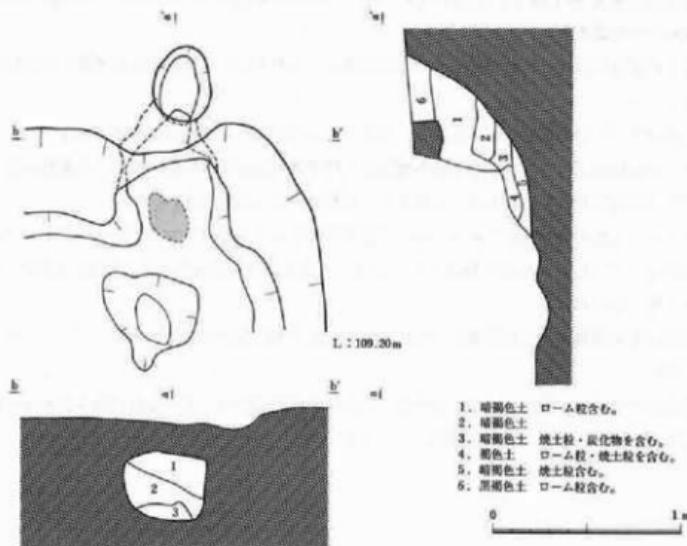
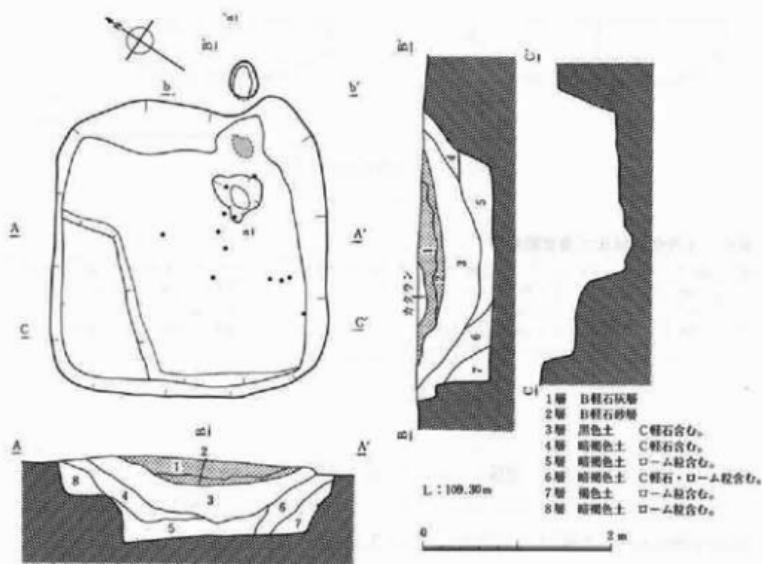
確認面は第II層上面で、壁高は81cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がっていたものと思われる。床面は全体に踏み固めがやや認められる。

覆土は上層にB軽石純層が堆積し、その下部にC軽石を含む黒色土が入り、自然堆積を示す。

周溝、ピット、貯蔵穴は検出されなかった。

カマド 東壁で検出された。袖は検出されていないが、壁面のロームに焼土痕が残っている。煙道は天井部が一部残っている。壁から煙道部までは50cmを計る。火床部は数cmの掘り込みで、焼土痕が残る。

遺物は土師器の壺、甕が少量出土している。



第21図 4号住居跡実測図



第22図 4号住居址出土遺物

表6 4号住居址出土遺物観察表

番号	器 形	遺存度	法量(cm)	器 形、底・壁 形 の 特徴	胎 土	成 成	色 调	備 考
1	土器 环	ほぼ完 成	口径 13.4 器高 3.6	外面ヘラ削り。底部やや歪む。 内面ナデ。	砂粒を含む。	良好	棕褐色	
2	土器 环	口径 1/3	11.8 器高 3.0	口縁部やや傾を持つ。 外面ヘラ削り。内面ナデ。	緻密	良好	にぶい褐色	

5号住居址 (第23・24図 図版7-2, 8, 19 表7)

本址は調査区東側X107・108 Y168・169グリッドで検出された。主軸方向はN74°Eである。規模は長軸4.13m、短軸2.67mで南北に長い長方形を呈する。

確認面は第II層上面で、壁高は58cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は全体に踏み固めがやや認められる。

覆土は上層にB軽石純層が10cmから20cm堆積し、その下部にC軽石を含む黒色土が堆積している。

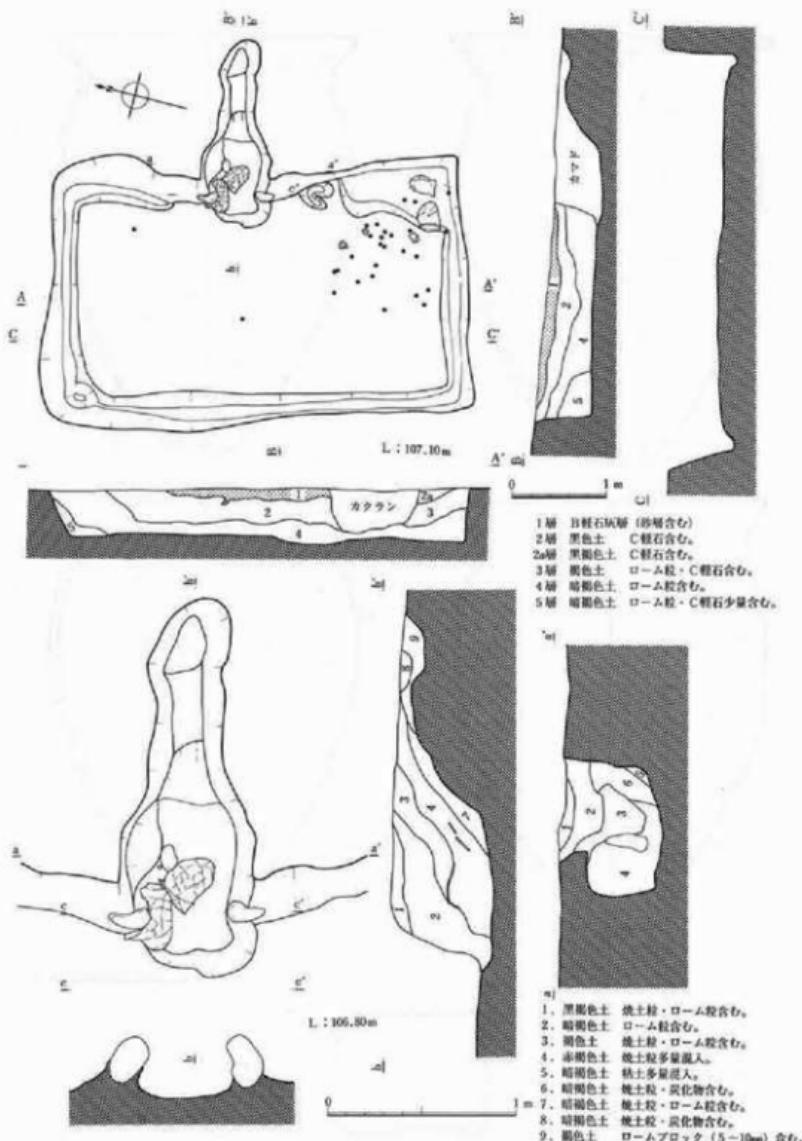
周溝はカマド付近を除いて全周する。周溝の幅は約30cm、深さは20cm前後である。

ピットは検出されていないが、北西側と南東側の隅角付近がやや低くなる。南東側の低くなる部分は貯蔵穴状のものとも考えられるが、不整形で掘り込みも浅い。

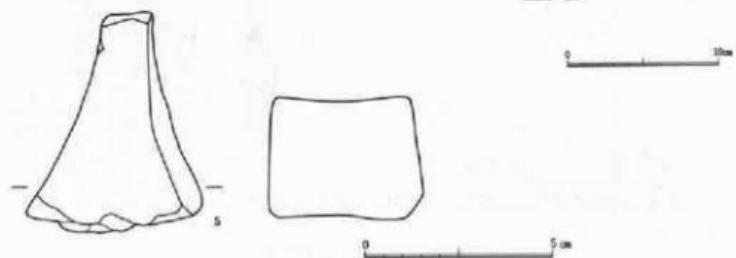
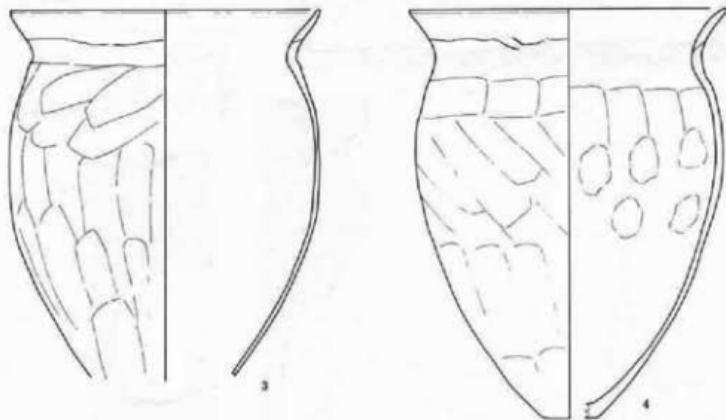
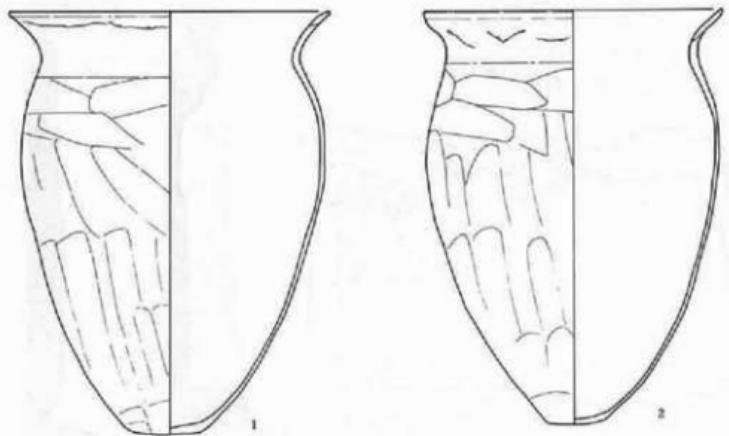
カマド 東壁中央で検出された。抽には石が利用されている。カマド中央部の北よりには支脚に使用したと思われる石が検出されている。煙道の壁外への掘り込みは150cmと長い。充填土は9層に分けられる。

遺物は南東側隅角から長胴甕が2個体、カマドからも長胴甕が2個体出土している。他は細片が多い。

遺物の分布は北西側には少なく南東側に集中する傾向がある。また遺物の組み合わせも他の住居址とは違い、甕が多く壺は破片のみである。



第23図 5号住居址実測図



第24図 5号住居址出土遺物

表7 5号住居址出土遺物観察表

番号	器 形	遺存度	法長(cm)	器 形、成・整 形 の 特 殊	胎 土	燒 成	色 調	備 考
1	土師 甕	ほぼ完 形	口径 21.6 器高 38.4 底径 4.4	器内薄い。口縁部外反し、底部丸底ぎみになる。 外表面上部横方向のヘラ削り。中・下部縱方向のヘラ削り。 内面ナデ。	砂粒を少 量含む。	良好	赤褐色	
2	土師 甕	ほぼ完 形	口径 20.0 器高 27.8 底径 3.8	器内薄い。口縁部外反する。底部すぼまり、丸底ぎみ になる。 外表面上部横方向のヘラ削り。中・下部縱方向のヘラ削り。 内面ナデ。	砂粒、石 粒をやや 多く含む。	やや不 良	にぶい褐色 外面黒褐色 土。	カマド出
3	土師 甕	2/3	口径 20.8 残存高 24.5	口縁部外反する。 外表面上部横方向のヘラ削り。中部縱方向のヘラ削り。 内面ナデ。	砂粒、石 粒を少量 含む。	良好	赤褐色	
4	土師 甕	1/2	口径 21.2 器高 27.4 底径 3.6	口縁部外反する。 外表面上部横方向のヘラ削り。中部斜方向の下部縱方 向のヘラ削り。 内面ナデ。一部縱方向のヘラ削り。捺付底。	砂粒、石 粒を含む。	良好	赤褐色	
5	砥石	1/2		残存の長さ7.3cm。4面に使用痕有り。	砥状岩		灰色	

6号住居址（第25・26図 図版9、20 表8）

本址は調査区中央X100・101Y172・173グリッドで検出された。主軸方向はN65°Eである。規模は長軸2.73m、短軸は2.34mで方形を呈する。

確認面は第II層上面で、壁高は56cmを計る。壁はやや外反ぎみに立ち上がる。床面は全体に踏み固めがやや認められる。

覆土は最上層にB輕石純層が円形に堆積する。その下層はC輕石をやや多く含む黒褐色系の土層で自然堆積を示す。

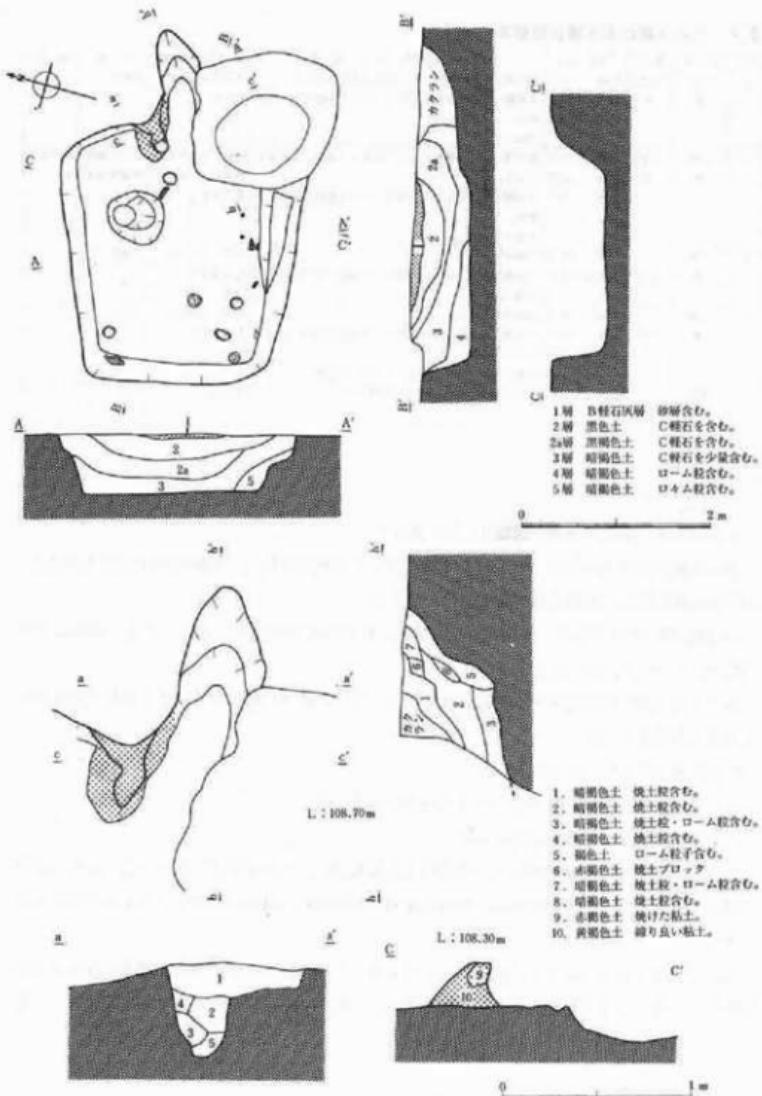
周溝は検出されていない。

ピットは中央に浅い皿状のものが1基検出されている。

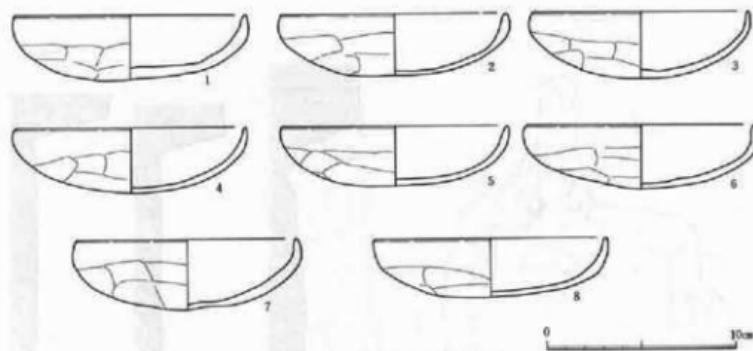
南東側にはカクラン土塙が存在する。

カマド 東壁中央で検出された。袖は粘土で構築され、約10cm壁内に張り出している。南側の袖はカクランにより不明である。煙道の壁外への掘り込みは約50cmで、立ち上がりはやや急である。

遺物は覆土中からはほとんど出土していないが、カマド内や床着状態で土師器の壺が8個体出土している。いずれも完形あるいは完形に近い。壺の2と3は重なった状態で出土している。



第25図 6号住居址実測図



第26図 6号住居址出土遺物

表8 6号住居址出土遺物観察表

番号	器形	底径	古量(cm)	器形、底・壁形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師 壺	定形	口径 12.3 器高 3.5	外面ヘラ削り。 内面ナデ。底部指圧痕ナデ。	緻密	良好	棕褐色	
2	土師 壺	定形	口径 12.0 器高 3.3	外面ヘラ削り。 内面ナデ。底部指圧痕。	砂粒を少 量含む。	良好	棕褐色。内 面黒斑あり。	3と重な って出土。
3	土師 壺	定形	口径 11.5 器高 3.5	外面ヘラ削り。 内面ナデ。底部指圧痕。	石粒を少 量含む。	良好	棕褐色	3の下面 で出土。
4	土師 壺	口径 4/5	器高 3.5	外面ヘラ削り。 内面ナデ。	緻密	良好	棕褐色	
5	土師 壺	定形	口径 12.0 器高 3.2	外面ヘラ削り。 内面ナデ。やや凸凹がある。	緻密	良好	棕褐色。外 面黒斑あり。	
6	土師 壺	定形	口径 12.1 器高 3.4	外面ヘラ削り。 内面ナデ。底部指圧痕。	緻密	良好	棕褐色	
7	土師 壺	定形	口径 11.8 器高 3.8	外面ヘラ削り。 内面ナデ。底部指圧痕。	緻密	良好	棕褐色	
8	土師 壺	定形	口径 12.4 器高 3.3	外面ヘラ削り。 内面ナデ。底部指圧痕。	緻密	良好	棕褐色。内 外面黒斑有 り。	

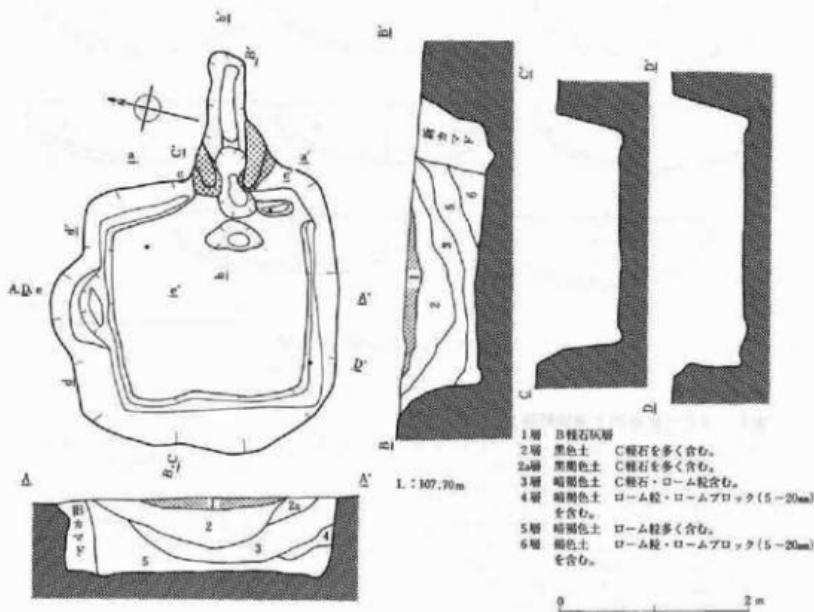
7号住居址（第27～29図 図版10、11-1、20 表9）

本址は調査区南東側X106・107 Y172・173グリッドで検出された。主軸方向はN71°Eである。規模は長軸3.13m、短軸2.90mで方形を呈する。

確認面は第II層上面で、壁高は76cmを計る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は全体に踏み固めが認められ、ほぼ平坦である。

覆土は上層からB軽石純層、C軽石を含む黒褐色土、ローム粒子を含む暗褐色土などに分層され、自然堆積を示す。

周溝は東側のカマド付近を除いて全周する。周溝の幅は20cm前後、深さは10cmである。



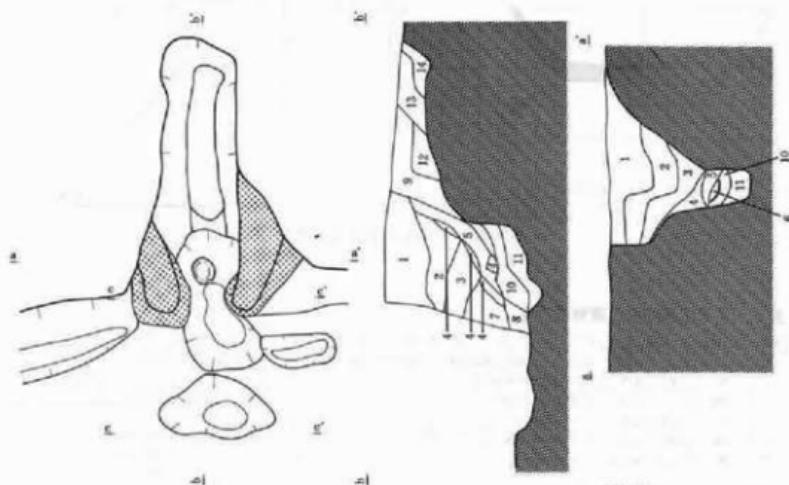
第27図 7号住居址実測図(1)

ピットは東側のカマド付近に浅い掘り込みがある。

カマド 北側中央と東側中央の2ヶ所で検出された。北側のカマドは旧カマドと思われ、袖、支脚等は検出されていない。煙道の壁外への掘り込みは20cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。充填土には焼土はほとんど含まれない。カマドとして使用されていたか疑問である。

東側のカマドは遺存状態がやや良かった。袖はロームと粘土で作られており、壁内への張り出しある。支脚は検出されなかった。煙道の壁外への掘り込みは120cmである。充填土の最下層には青灰色の灰層が認められた。

遺物は少なく、カマドから須恵器の壺が出土しているほか、土師器の壺、甕が少量出土している。また本址は縄文時代の包含層を掘り込んで作られているため、縄文時代早・前期の石器の剥片がかなりまとまって出土している。



新カド

1. 黒褐色土 ローム粒含む。
2. 褐色土 ローム粒・ロームブロック (2-10mm) 含む。
3. 黑褐色土 ローム粒・ロームブロック (2-10mm) 含む。 粘土粒微量含む。
4. 灰褐色土 粘土を多く含む。 硅土粒を微量含む。
5. 赤褐色土 硅土層。
6. 黑褐色土 硅土粒含む。
7. 褐色土 ローム粒・炭化物含む。
8. 黑褐色土 硅土粒・炭化物含む。
9. 黑褐色土 硅土粒・ローム粒含む。
10. 褐色土 ローム粒含む。
11. 紫色土 灰層。
12. 喀斯特土 硅土粒・ローム粒含む。
13. 褐色土 ローム粒・炭土粒含む。
14. 黑褐色土 硅土粒含む。
15. 黑褐色土 硅土ブロック微量含む。 粘土少量含む。
16. 黄褐色土 粘土少量含む。
- 16a. 黄褐色土 粘土粒・ローム含む。
17. 赤褐色土 硅土粒・ローム含む。
18. 赤褐色土 硅土粒・ローム含む。

L : 107.05m



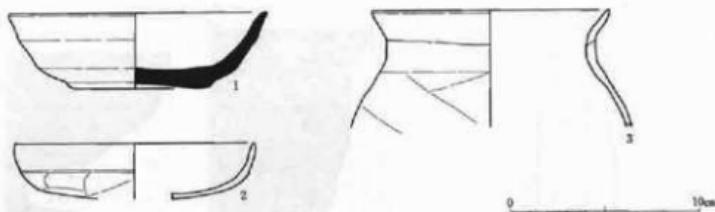
L : 107.70m

旧カド

1. 黑褐色土 ローム粒含む。
2. 褐色土 ローム粒含む。
3. 黑褐色土 ローム粒含む。
4. 黑褐色土 ローム粒含む。
5. 喀斯特土 ローム粒子含む。

0 1 m

第28図 7号住居址実測図(2)



第29図 7号住居址出土遺物

表9 7号住居址出土遺物観察表

番号	器 形	遺存度	口径(cm)	器形、成・變 形 の 特 徴	胎 土	燒 成	色 調	備 考
1	環 形	ほぼ完 成	口径 13.8	口クロ成形。底部回転ヘラ削りの様一部ヘラ削り。 底部や焼削する。	石粉を含 む。	良好	灰褐色	新カマド 出土。
2	土師 壺	1/3存	口径 12.8	外側ヘラ削り。 内面ナデ。	緻密	良好	棕褐色	
3	土師 壺	口縁部 1/2存	口径 13.6 高さ 6.4	外側底部横方向へのヘラ削り。 内面ナデ。	砂粒を含 む。	良好	外表面褐色 内面にぶい 緑色	

8号住居址（第30・31図 図版11-2～5、12-1、20 表10）

本址は調査区南側X103・104 Y176・177グリッドで検出された。主軸方向はN 69°Eである。規模は長軸3.87m、短軸2.60mで東西にやや長い方形を呈する。

確認面は第II層上面で、壁高は76cmを計る。壁はやや外反して立ち上がる。床面は全体に踏み固めがやや認められ、ほぼ平坦である。

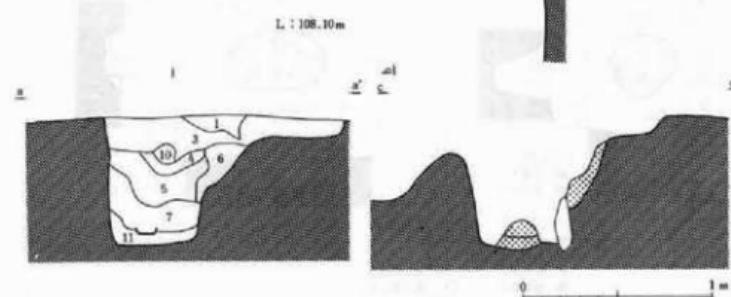
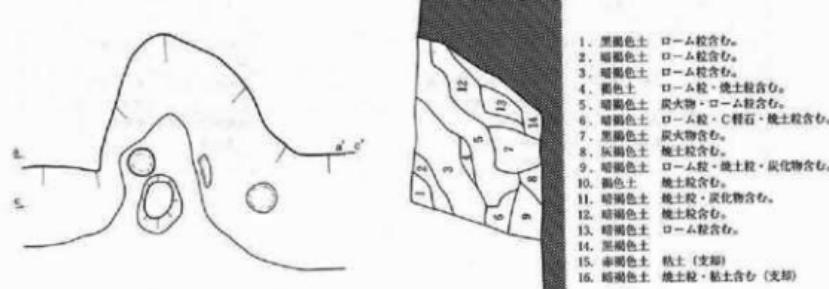
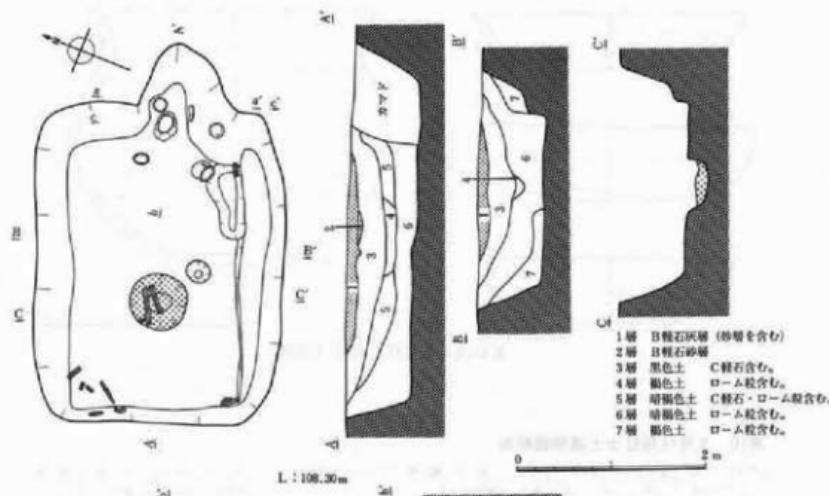
覆土は最上層からB軽石純層、C軽石を含む黒色土、ローム粒子を含む暗褐色土などが堆積している。

周溝は検出されなかった。

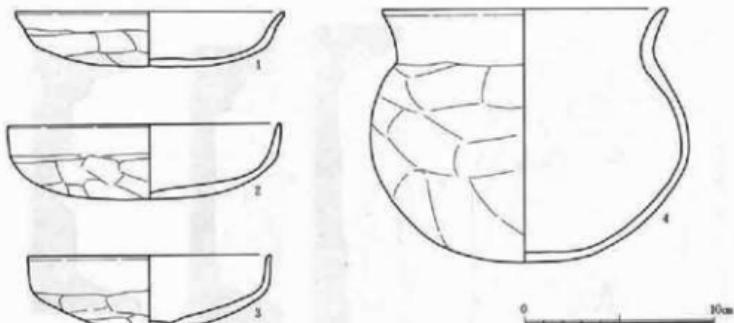
ピットは中央で2基検出された。いずれも浅いが、そのうちの1基は粘土を下部に貼っていた。

カマド 東壁中央で検出された。袖は南側のみに石と補強用と思われる粘土が検出されている。支脚は粘土で作られているが、かなり流失しており、原形をとどめていない。

遺物は少なく、土師器の壺・甕などが少量出土している。また本址は縄文時代前期諸磧a式期の住居址と重複しており、土器片、石器片が少量出土している。



第30図 8号住居址実測図



第31図 8号住居址出土遺物

表10 8号住居址出土遺物観察表

番号	器 形	遺存状	法量(m)	器 形、成・整 形 の 特 徴	胎 土	燒 成	色 調	備 考
1	土瓶 环	完形	口径 34.5 基高 2.9	口徑偏平。口部外反する。 外面へラ割り。 内面ナデ。	砂粒をや や多く含 む。	良好	赤褐色	
2	土瓶 环	完形	口径 34.6 基高 4.0	外面へラ割り。 内面ナデ。	砂粒を少 量含む。	良好	赤褐色	
3	土瓶 环	完形	口径 33.0 基高 3.9	外面へラ割り。捺压痕。 内面ナデ。捺压痕。	砂粒を含 む。	良好	褐色。内面 黒度あり。	
4	土瓶 甕	底部一 部欠	口径 15.2 基高 13.3	底部丸底。 外面へラ割り。 内面ナデ。	砂粒をや や多く含 む。	良好	棕褐色	

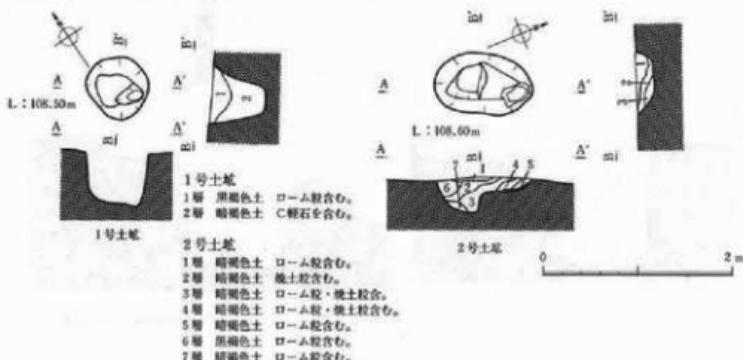


表32図 1・2号土甕実測図

1号土塁 (第32図 図版12-4)

本塁は調査区北側X109・110Y161グリッドで検出された。規模は65cm×65cmで、ややいびつな円形を呈する。

確認面は第II'層上面で、確認面からの深さは60cmである。壁はやや外反して立ち上がる。底面は南東側がやや深くなる。

覆土は自然堆積を示し、浅間C軽石をやや多く含む。

遺物は出土していない。

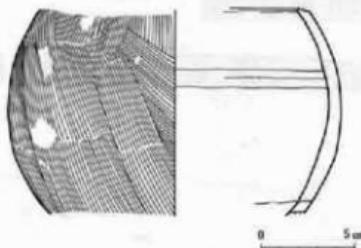
2号土塁 (第32・33図 図版12-5、20)

本塁は調査区南西側X97・Y180グリッドで検出された。規模は長軸105cm、短軸55cmで梢円形を呈する。

確認面は第II'層上面で、確認面からの深さは南東側で35cm、北西側で15cmである。壁はなだらかに立ち上がり、底部は2段の掘り込みになっている。

覆土は2層に焼土粒子をやや多く含む。

遺物は五領・石田川期の台付甕の破片が出土している。



第33図 2号土塁出土遺物

1号炭窯 (第34図 図版13-1~3 表12)

本炭窯は調査区北西側X96・97Y161・162グリッドで検出された。規模は長軸4.5m、短軸1.35mで、不整形である。

確認面は第II'層上面で、確認面からの深さは8cm前後である。壁はなだらかに立ち上がり、床面はやや凹凸がある。

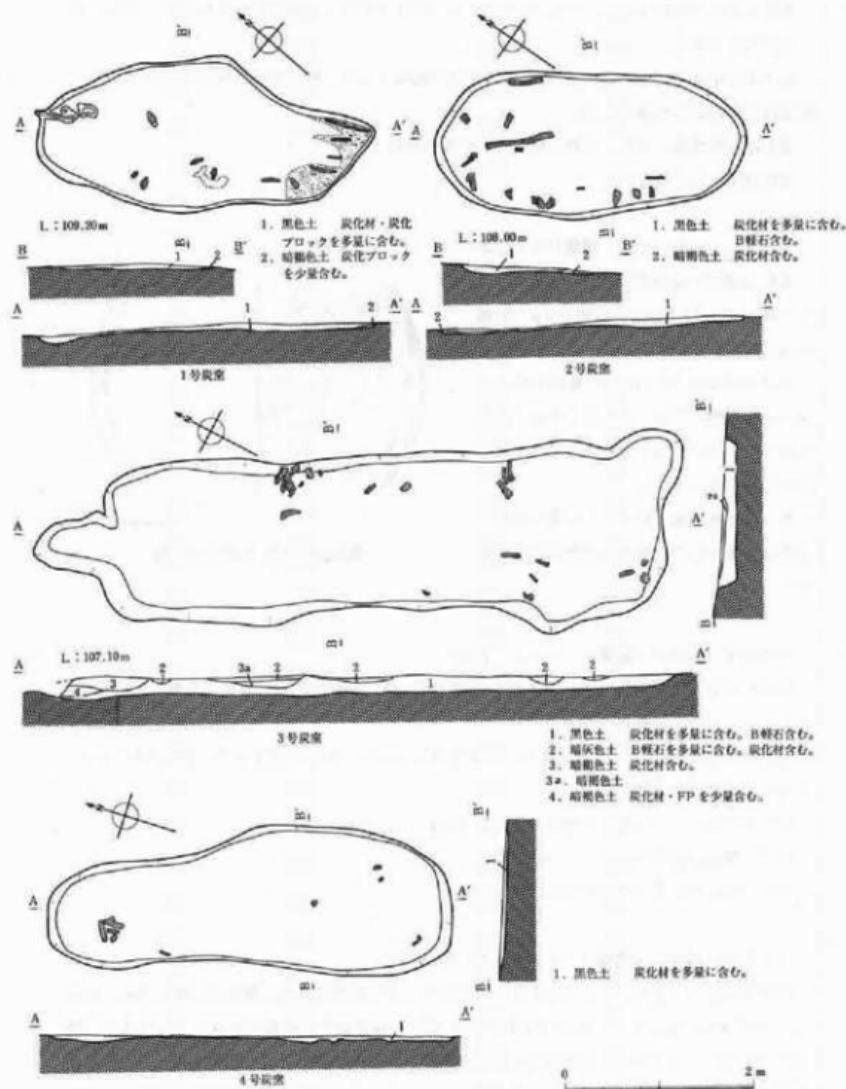
覆土は2層に分けられ、炭化材をやや多く含む。

焚口・煙道は不明である。

遺物は炭化材が少量南側を中心に検出された。

2号炭窯 (第34図 図版13-4~6 表12)

本炭窯は調査区北側X102・103Y161・162グリッドで検出された。規模は長軸3.32m、短軸1.59mで梢円形を呈する。確認面は第II'層上面で、確認面からの掘り込みは8cmと浅い。壁はなだらかに立ち上がる。床面はやや凹凸があり、北西側から南東側へ傾斜する。覆土は炭化材を含む黒色土を基調とし、B軽石を少量含んでいる。焚口・煙道は検出されていない。遺物は北西側を中心に炭化材が少量出土している。



第34図 1・2・3・4号坑窓実測図

3号炭窯（第34図 図版13-7、8 表12）

本炭窯は調査区北東側X105・106 Y160・161グリッドで検出された。規模は長軸6.71m、短軸1.63mで長方形を呈し、北側中央には突出部が存在する。

確認面は第Ⅱ層上面で、確認面からの掘り込みは19cmを計る。壁はなだらかに立ち上がり、床面はほぼ平坦である。

覆土はB軽石、炭化材を含む黒色土を主体とする。

北側の突出部は煙道部と思われ、焼土痕がわずかに認められた。

遺物は炭化材のみの出土である。

4号炭窯（第34図 図版14-1、2 表12）

本炭窯は調査区北東側X106 Y163・164グリッドで検出された。規模は長軸4.3m、短軸1.5mで、梢円形を呈する。

確認面は第Ⅱ層上面で、確認面からの掘り込みは5cmと浅い。床面はやや凹凸が見られる。

覆土は炭化材を含む黒色土である。

煙道部・焚口等は検出されていない。

遺物は炭化材が北側を中心に少量出土している。

5号炭窯（第35図 図版14-3、4 表12）

本炭窯は調査区東側X140 Y170・171グリッドで検出された。規模は長軸3.85m、短軸1.6mで、不整形を呈する。

確認面は第Ⅱ層上面で、確認面からの掘り込みは南西側の最深部で14cmを計る。北東側は斜面のため、壁は検出されなかった。床面はやや凹凸があり、北東側から南西側へわずかに傾斜する。

覆土は炭化材・B軽石を含む黒色土を主体とする。

煙道・焚口等は検出されていない。

遺物は炭化材がわずかに散る程度である。

6号炭窯（第35図 図版14-5、6 表12）

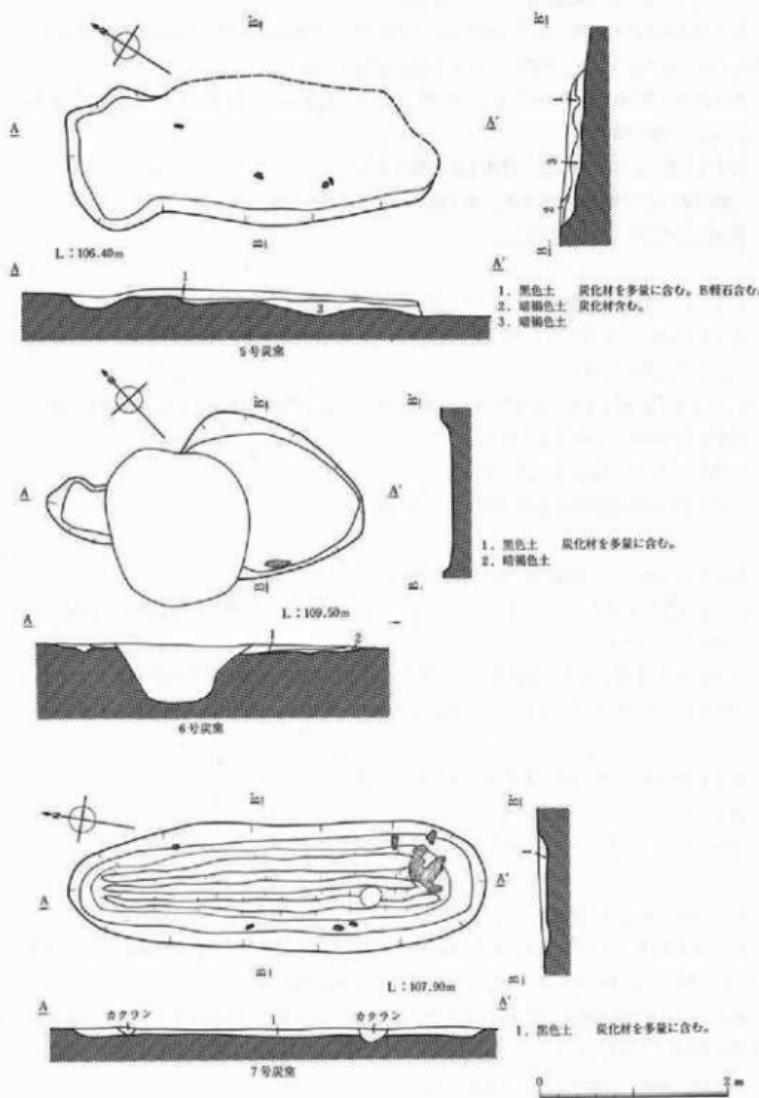
本炭窯は調査区南西側X96・97 Y178グリッドで検出された。規模は長軸3.38m、短軸1.78mである。中央部にカクランが入るため形状は不明である。

確認面は第Ⅱ層上面で、確認面からの掘り込みは12cmである。壁はなだらかに立ち上がり、床面はやや凹凸が見られる。

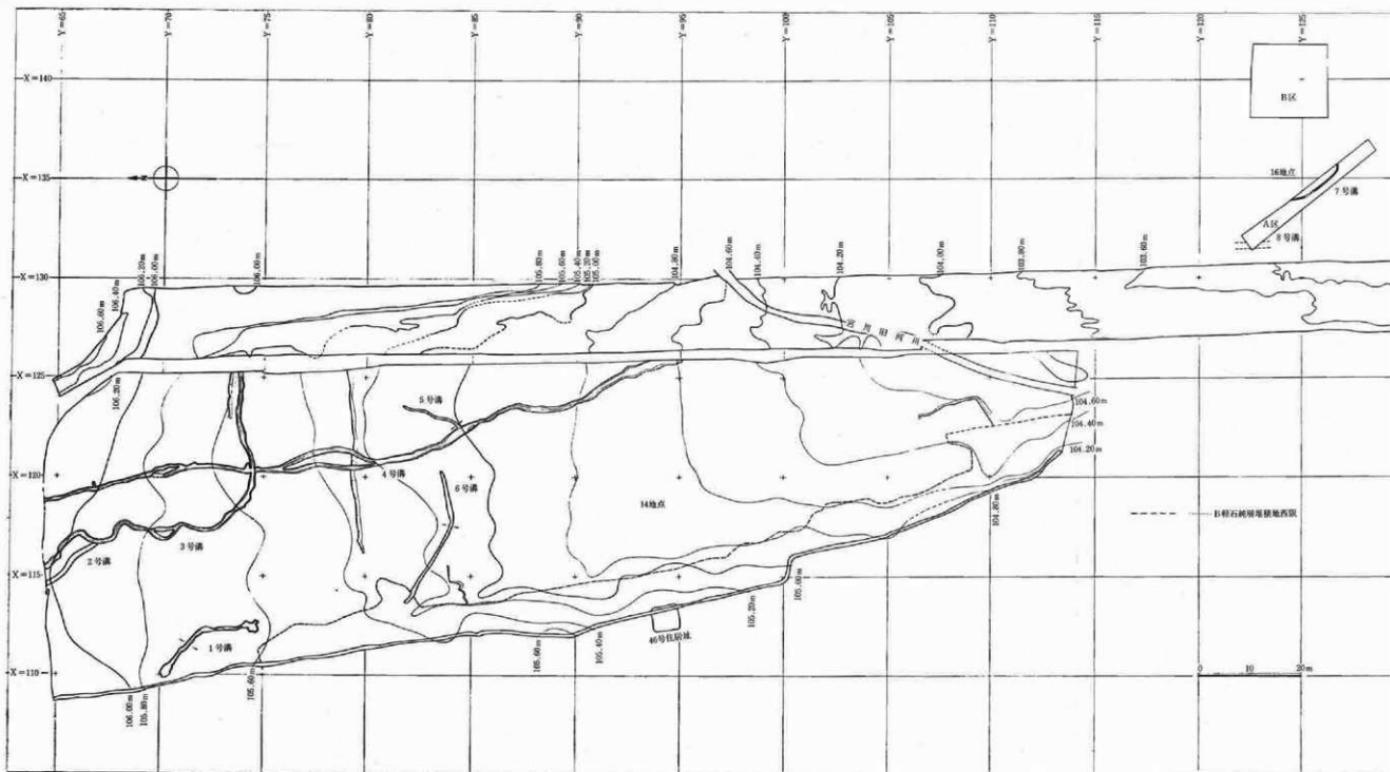
覆土は炭化材を含む黒色土を主体とする。

煙道・焚口は不明である。

遺物は炭化材が少量出土している。



第35図 5・6・7号炭窯実測図



第36図 植久保遺跡（第14・16地点）全測図

7号炭窯（第35図 図版13-7、8 表12）

本炭窯は調査区南側X105・106Y181・182グリッドで検出された。規模は長軸4.5m、短軸1.35mで、長辺円形を呈する。

確認面は第II層上面で、確認面からの掘り込みは9cmである。壁はなだらかに立ち上がる。床面は南北に筋状の凹凸が認められる。

覆土は炭化物を多く含む黒色土を基調とする。

煙道・焚口は検出されなかった。

遺物は南側を中心に炭化材がやまとまって出土している。

表11 住居址一覧表

番号	検出グリッド	規模(m)		主軸方向	プラン	掘り込み(cm)	ピット(土坑)	周溝	カマド	備考
		長軸	短軸							
1	X109-111 Y171-173	4.84	3.42	N64°E	縦長方形	72	床面下 土坑1 ピット1	全周 東壁		覆土上層にB輕石 純層堆积。
2	X107, 108 Y167, 168	4.47	4.25	N76°E	方形	64	なし	なし	東壁	覆土上層にB輕石 純層堆积。
3	X106, 107 Y168, 169	4.32	2.89	N8°E	横長方形	36	3	なし	北壁2	
4	X 96, 97 Y164, 165	3.15	2.88	N53°E	縦長方形 北西側張り出し	81	なし	なし	東壁	覆土上層にB輕石 純層堆积。
5	X107, 108 Y168, 169	4.13	2.69	N74°E	縦長方形	58	なし	全周	東壁	覆土上層にB輕石 純層堆积。
6	X106, 101 Y172, 173	2.73	2.34	N65°E	縦長方形	56	なし	なし	東壁	覆土上層にB輕石 純層堆积。
7	X106, 107 Y172, 173	3.13	2.90	N71°E	方形	76	なし	全周	新東壁 旧北壁	覆土上層にB輕石 純層堆积。
8	X103, 104 Y176, 177	3.87	2.60	N69°E	縦長方形	76	なし	なし	東壁	覆土上層にB輕石 純層堆积。

表12 炭窯一覧表

番号	検出グリッド	規模(m)		主軸方向	プラン	掘り込み(cm)	備考
		長軸	短軸				
1	X 96, 97 Y161, 162	3.5	1.68	N40°W	不整形	8	
2	X102, 103 Y161, 162	3.32	1.59	N35°W	端内形	8	
3	X105, 106 Y160, 161	6.71	1.63	N28°W	長方形	19	覆土上層にB輕石(純層ではない)堆积。 煙道部?残存。
4	X106 Y163, 164	4.3	1.5	N18°W	不整形	5	
5	X110 Y170, 171	3.85	1.6	N35°W	不整形	14	斜面上に位置する。
6	X 96, 97 Y178	3.38	1.78	N48°W	不整形	12	中央部にカクラン。
7	X105, 106 Y181, 182	4.5	1.35	N 9°W	長辺円形	9	

第6節　まとめ

本遺跡は縄文時代から平安時代までの複合遺跡である。ここでは古墳時代以降の遺構・遺物について若干のまとめをする。

古墳時代

本遺跡で検出された遺構で、古墳時代に属するのは2号土塁1基である。2号土塁は遺跡南端で検出され、その南側は削平されており、同時代の遺構は南側に存在していたと思われる。

2号土塁は遺物から前期五領・石田川期と考えられる。

奈良・平安時代

住居址8軒、炭窯7基が検出された。

住居址は8軒のうち、3号住居址を除く7軒は、やや似かよっている。主軸方向はN53°EからN74°Eまでの間に集中する。カマドは東壁の中央に位置し、主柱穴を持たない。確認面からの掘り込みは56cmから81cmとやや深く、覆土上層には浅間B軽石純層が認められる。規模は中・小形である。

これら7軒の住居址の中で差違が認められるのは、平面形、周溝、カマドの構築材などである。平面形は1・4・6・8号住居址がやや縱長の長方形を呈し、2・7号住居址は方形を、5号住居址が横長の長方形を呈する。周溝は1・5・7号住居址が全周する。カマドの構築材は1号住居址が瓦と粘土を利用し、2・4号住居址は地山のロームを利用している。5・8号住居址は袖に石を利用し、6号住居址は粘土を利用している。又8号住居址には粘土製の支脚と、壁に補強材としての粘土が認められた。

住居址の時期について考えると各住居址間には時間差がそれほど感じられず、8世紀の後半から末葉と考えられる。尚1・2・6号住居址からは壙がやまとまって出土している。これらの壙を比べると、6号住居址の壙は1・2号住居址の壙に比べてやや小形である。また2号住居址出土の壙は、1・6号住居址の壙に比べてやや偏平になる。時間的な差であろうか。

炭窯は7基が検出されているが、3号炭窯の覆土上層に浅間B軽石が認められたことと、他の炭窯からも、B軽石が検出されたことなどから平安時代後期の所産と考えられる。尚同様の炭窯は60年度調査の源訪遺跡第2・3地点、柳久保遺跡第5地点でも検出されている。これらの炭窯は覆土最上層に浅間B軽石純層を薄くのせている。

炭窯から出土した木炭は鑑定の結果（山内文氏の鑑定による）、櫻であることが判明した。

1号土塁は出土遺物もなく時代決定はできなかったが、覆土中に浅間C軽石を含むことから古墳時代から奈良・平安時代にかけての所産と考えられる。

第6章 柳久保遺跡（第14・16地点）

柳久保遺跡（第14・16地点）は柳久保水田址として、第6・8・12地点と共に調査された。しかし、第14・16地点は調査の結果、浅間B軽石下には水田址に併なう遺構は検出されなかつた。そこで本報告では水田址という名称を削除する。

第1節 遺跡の立地

柳久保遺跡（第14・16地点）は、舌状台地に狭まれた開析谷上に位置する。この谷は遺跡群中央を南北に延びる宮川の開析谷と、深掘から南東に延びる開析谷からなり、下鶴谷付近で合流する。第14・16地点は柳久保遺跡（第11地点）と中鶴谷遺跡（第15地点）に狭まれた谷に立地し、第14地点が宮川の右岸、第16地点が左岸に位置する。標高は103mから107mで北から南へ緩やかに傾斜している。台地との比高は10m前後である。尚本遺跡は最近まで水田であった。

第2節 調査の経過

昭和61年度の調査は、第14・16地点の2地点に分けて実施された。

- 4月11日 第14地点の調査開始。調査区内に雑草が繁茂していたので、基準杭を探す。
- 4月14日 2m×2mのグリッドを8カ所掘り下げ、表土の厚さを調べる。
- 4月18日 第14地点北側より表土排土開始。
- 4月30日 第14地点西側の台地縁辺部分の遺構確認。
- 5月1日 台地縁辺部に最近まで流れていた小川の跡を掘り下げて、排水溝とする。
- 5月6日 排水溝の掘り下げ終了。
- 5月7日 第14地点のB軽石層掘り下げ開始。
- 5月13日 2号溝の掘り下げ。
- 5月16日 昨日の雨で溢った水を排水する。
- 5月22日 3・4号溝の掘り下げ開始。
- 5月27日 1号溝の掘り下げ。
- 5月28日 溝水が多く3・4号溝の掘り下げを一時中断する。表土排土終了。
- 6月4日 梅雨に備え近・現代の暗渠を掘って排水溝とする。
- 6月6日 暗渠の掘り下げを終了し、B軽石層の掘り下げを再開。
- 6月25日、26日 6号溝の掘り下げ。
- 7月2日 排水溝がつまり、南半分が水没。
- 7月31日～8月2日 3・4号溝の掘り下げ。
- 8月5日 昨日の雨で南側が水没。
- 8月6日、7日 台地縁辺部の精査、表土排土。

8月8日 高所作業車を使って写真撮影。

8月11日、12日 第14地点の全体測量。第14地点の調査終了。

8月18日～21日 第16地点のトレンチ精査。

8月26日、27日 第14地点・第16地点で、プラントオパール調査のため土壌採集。

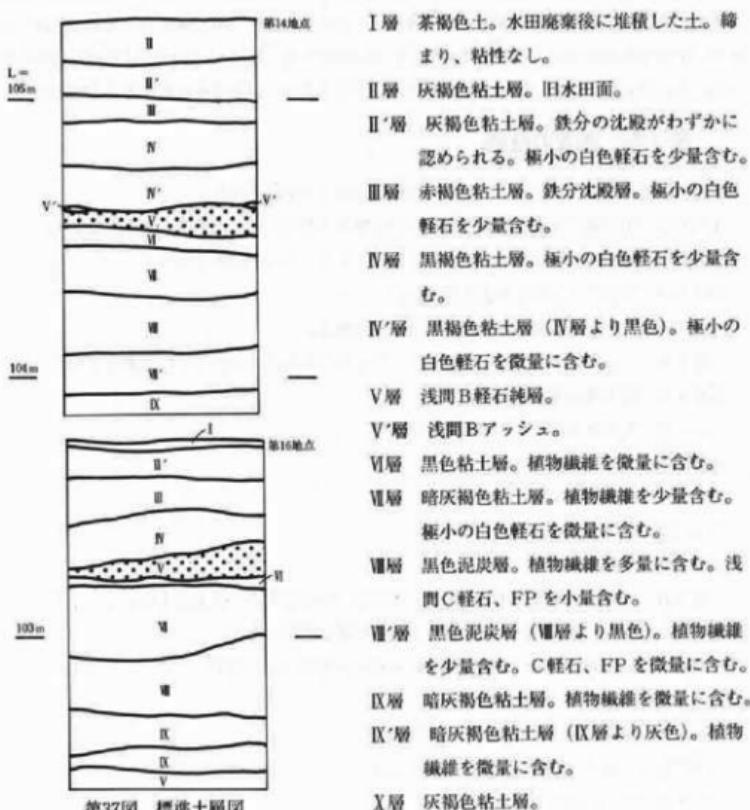
10月28日、29日 第16地点で4箇所のグリッドを掘り下げ、土層を調査。

11月15日 第16地点の表土排土。

11月19日～21日 第16地点の遺構確認、掘り下げ。

11月25日 図面作成、写真撮影を完了。第16地点の調査終了。

第3節 土層（第37図）



第4節 検出された遺構と遺物

柳久保遺跡（第14・16地点）に於いて、8条の溝と遺物包含層を検出したが、畦畔は検出されなかった。また、4箇所で段差が確認され、特に、第14地点南端の段差は台地縁辺部から東に張り出し、長方形の区画を持つものである。尚、昭和59年度に調査した宮川河川改修部分と関連するため、第36図に同改修部分の全体図を加えた。

1号溝（第38図 図版23-1）

本溝は第14地点の北西を北から南へ延びている。溝幅は北端で185cm、くの字状に折れる中央部で90cm、南端で218cmで、南北両端が脹らんでいる。台面形は逆台形を呈し、深さは28cmを測る。覆土は灰白色の砂をラミナ状に含む黒褐色泥層である。尚、北端から多数の木片が検出されている。

2号溝（第38図 図版23-2・3）

本溝は第14地点北端のはば中央部から南へ延びて3号溝と交わる。溝幅65cm、深さ15cmの浅い溝で、断面形は皿状を呈する。覆土は浅間B軽石純層である。遺物は出土していない。

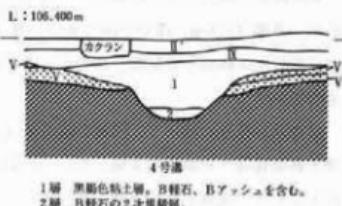
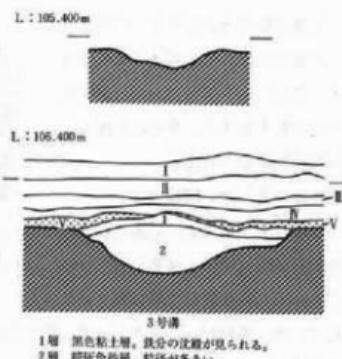
3号溝（第38・40図 図版23-3～6）

本溝は蛇行しながら第14地点北東部を巡っている。溝幅は北端で149cm、北から東へ大きく曲がる部分で135cm、東端で110cmである。深さは31cmで、断面形は鍋底状を呈する。また、X=117、Y=70付近で2条に分れ、東側の溝は幅80cm、深さ38cm、西側は幅60cm、深さ62cmと深い。本溝は浅間B軽石純層（標準土層第V層）から約10cm下の暗灰褐色粘土層（標準土層第VI層）より掘り込まれ、覆土は粒径の大きい砂層である。

遺物はX=121、Y=74付近の底部より須恵器の壊が出土しているほか、土師器・須恵器の小片が出土した。

4号溝（第38・40図 図版23-6～8）

本溝は第14地点を貫く様に北西から南東に延びている。溝は規模は北端で幅194cm、深さ38cm、南端付近で幅146cm、深さ20cmを測る。またX=



第38図 1・2・3・4号溝実測図

120、Y=70付近及び、X=120~121、Y=76~80付近で2条に分れる部分がある。覆土は浅間B軽石・Bアッシュを含む黒褐色泥層を主体とする。遺物は土師器・須恵器の小片が出土している。

5号溝（第39図 図版24-1）

本溝は第14地点にあり、北から南へ延びて4号溝と交わる。溝幅60cm、深さ11cmの浅い溝で、断面形は皿状を呈する。覆土は浅間B軽石純層である。遺物は出土していない。

6号溝（第39図 図版24-2）

本溝は第14地点にあり、中央部がくの字状に折れて北西から東に延びる。溝幅71cm、深さ18cmで、断面形は逆台形を呈する。覆土は暗褐色・黒褐色粘土層から成る。

7号溝（第39図 図版24-5）

本溝は第16地点A区にあり、浅間B軽石純層（標準土層第V層）から約70cm下の灰褐色粘土層に掘り込まれている。溝幅40cm、深さ23cmで、断面形は逆台形を呈する。覆土は粒径の大きい砂層である。

8号溝（第39図 図版24-6）

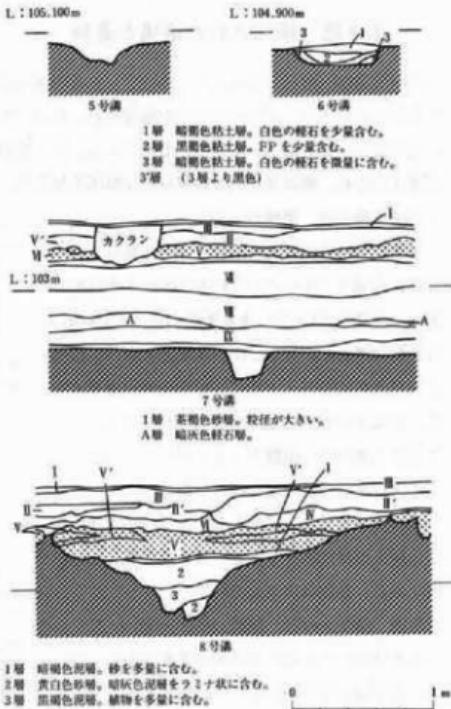
本溝は第16地点A区の北壁及び、西壁北側の断面によって確認された。南北に延びる溝と思われ、溝幅は236cm、深さ66cmである。覆土上層に浅間B軽石純層が堆積していた。尚、本溝は宮川河川改修部分で検出された1号溝の可能性がある。

遺物包含層

第16地点B区に於いて、浅間B軽石純層（標準土層第V層）より約30cm下の黒色泥炭層（標準土層第Ⅵ層）の調査を実施した。その結果、土師器・須恵器片及び、種子、木器片、木片が出土したが、遺構は検出されなかった。

46号住居址（柳久保遺跡第11地点）

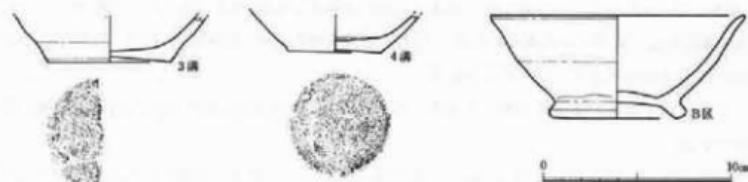
本住居址は柳久保遺跡（第11地点）内にあるが、柳久保遺跡（第14地点）と併行して調査を実施したので、ここに概要を報告する。



第39図 5・6・7・8号溝実測図

本住居址は第11地点の存在する舌状台地の縁辺部にあり、長径520cm、短径510cm、壁高55cmである。覆土はFPを含む暗褐色・黒褐色土を主体とし、第2層にFAが堆積していた。周溝は全周し、ピットが4本検出された。また、南東隅に貯蔵穴を検出した。炉址は確認されなかつたが、北側において焼土の散乱が認められた。

遺物は壇・甕・高坏などで、5世紀初頭のものである。また、炭化物が多く出土し、火災住居の可能性がある。



第40図 柳久保遺跡（第14・16地点）出土遺物

3号溝出土遺物（第40図-1）

須恵器の坏片である。底径は6.2cm、残存高は2.5cmである。胎土は石粒を少量含む。焼成は良好である。色調は灰褐色を呈する。底部は回転糸切り無調整である。出土位置は底部付近である。

4号溝出土遺物（第40図-2）

土師質土器の坏の底部片である。底径は6.2cmである。胎土は緻密。焼成は良好で、色調は黒灰褐色を呈する。底部は回転糸切り無調整である。出土位置は覆土中である。

柳久保遺跡第16地点B区出土遺物（第40図-3 図版24-8）

B区からは流れ込みと思われる遺物がやや多く出土しているが、固化したのは1片のみである。

土師質土器の坏である。残存。胎土は砂粒、石粒をやや多く含む。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。底部は回転糸切りで、八の字状の高台を有し、ロクロ成形である。東側壁際B輕石純層より3層下層から出土している。

第5節　まとめ

柳久保遺跡（第14・16地点）において、8条の溝が検出された。また、4箇所で段差を確認したが、畦畔は検出されなかった。

8条のうち、浅間B軽石降下以前の溝は3号溝と7号溝である。3号溝の出土遺物は数点だけであるが、底部より出土した坏は、10世紀後半のものである。7号溝はB軽石純層より約70cm下の第Ⅲ層に掘り込まれていた。断面形は箱形で、人為的に掘り込まれた形態を呈する。

B軽石降下当時の溝は2号溝、5号溝、8号溝である。2号溝、5号溝とも浅い溝で、5号溝はしだいに浅くなって消滅する。両溝とも雨水が流れる程度の溝であったと思われる。8号溝は幅236cm、深さ66cmの溝であるが、覆土上層にB軽石純層が堆積しており、B軽石降下当時には大部分が埋没していたようである。

B軽石降下以後の溝は1号溝、4号溝、6号溝である。その他、近・現代の暗渠が縦横に延びていた。

段差はY=74のラインを東から約9m延びる段差、X=80ラインを東から約36m延びる段差、6号溝の南側に台地縁辺部から延びる段差があるが、いずれも不明瞭なものである。また南端において長方形の区画を呈する段差がある。

第14地点においてB軽石純層下の調査を行なったが、水田址としての確証は得られなかった。B軽石降下時に水田が營まれていた可能性は極めて薄いと考えられる。

第16地点B区において第Ⅲ層の調査を行なった。その結果、水田址としての構造は検出されなかったが、土師器・須恵器のほか種子・木片が検出された。出土した土師器・須恵器は大部分が磨滅した小片で、8世紀末から11世紀のものである。種子は鑑定の結果オニグルミとモモであることが判明した。第16地点北側の台地（中鶴谷遺跡）では昭和59年度の確認調査で多数の住居址が検出されているが、これらの住居址からの遺物の流れ込み、或いは投棄と考えられる。

プラントオバールの結果、種子の鑑定結果の詳細については次章を参照されたい。

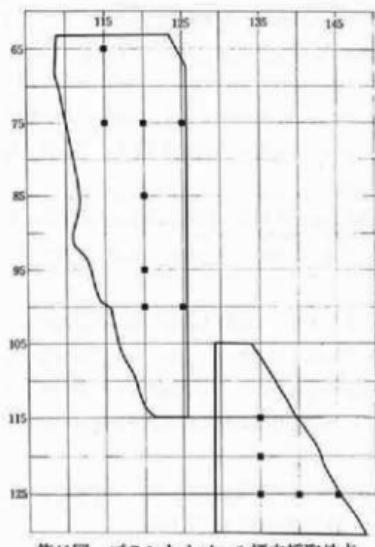
参考文献

- | | |
|---------------|--------------------|
| 荒砥鳥原遺跡 | 1980 郡馬粘土文化財調査事業 |
| 荒砥北山遺跡群発掘調査報告 | 1984 群馬県教育委員会 |
| 芳賀田地遺跡群第1巻 | 1984 前橋教育委員会 |
| 堤 東 遺跡 | 1985 群馬県教育委員会 |
| 柳久保遺跡群I | 1985 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 |
| 柳久保遺跡群II | 1985 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 |
| 柳久保遺跡群III | 1986 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 |
| 前 山 遺跡 | 1986 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 |

第7章 科学分析

I プラント・オパール分析結果

古環境研究所



第41図 プラントオパール標本採取地点

1. はじめに

柳久保遺跡14区では、昭和61年8月までの発掘調査により浅間Bテフラ直下面が検出されていたが、畦畔等が確認されず水田跡かどうかを判断する決め手に欠けていた。

今回のプラント・オパール分析調査の目的は、発掘調査によって検出されていた面における水田跡の分析的検証と、未発掘の16区における水田跡の事前調査である。

2. プラント・オパール分析法（略）

3. 試料

現地調査は、昭和61年8月26日～27日行なった。

調査地点は、調査区に設定されていた20mメッシュの交点から13地点を任意に選定した

（第41図参照）。このうちY=105ラインより北側の14区は、発掘調査により浅間Bテフラ直下面が検出されていたところである。

試料の採取は、各地点に掘削されたピット内の壁面において、山武考古学研究所の調査員が行った層位区分に従い、各層ごとに100cc採土管を用いて採取した。層名は層相の変化ごとに上層から順に付けた番号であり、地点間の対応関係を示したものではないので注意されたい。

当調査区では、浅間Bテフラの他にもFPと浅間Cテフラが見られたが、これらは色や発砲の様子から現場で認定されたものであり、専門家の同定によるものではない。

採取した土壤試料は13地点138試料であり、これら全てについて分析を行なった。

4. 分析結果

イネ、キビ族（ヒエ等）、ヨシ属、タケア科（竹節類）、ウシクサ族（ススキ等）について同定・定量を行ない、数値データを表13～16に示した。上記以外のプラント・オパールについては、検出数が少ないので割愛した。

イネについては、土柱図の右側に機動細胞プラント・オパールの出現状況をプロットし、図42に示した。これは、水田跡の可能性を判定する際の基礎的な資料となる。土柱図中のドットは、試料を採取した位置を示している。

5. 考察

120-75地点は、当調査区の平均的な堆積状況を示しており、現地表面から浅間Cテフラの下層まで連続してサンプリングを行なった（図42参照）。なお、同地点ではFPは確認されなかった。

同地点の現地表面（1層）とその下層（2層）からは、5,000個/ccを越える多量のイネ機動細胞プラント・オパール（以下イネのプラント・オパールと略す）が検出された。これは、当地点付近の現況が水田であったことと符号している。

3、4層では、イネのプラント・オパールは検出されたものの、量的に少ないと上層からの落ち込みの可能性が考えられる。また、5層、7層（浅間Bテフラ層）からは、イネのプラント・オパールは全く検出されなかった。

浅間Bテフラ層直下の8層では、イネのプラント・オパールは検出されたものの1,000個/cc未満と非常に少ないと、ここでイネが生産されていたことは考えにくい。5、7層を通して上層のプラント・オパールが落ち込んだ形跡は見られないため、ここで検出されたイネのプラント・オパールは当時の周辺の水田から流れ込んだものと考えられる。なお、同層からはヨシ属のプラント・オパールが多量に検出された。

9層では、およそ5,000個/ccのイネのプラント・オパールが検出され、ピークを形成している。このことから、ここでイネが生産されていた可能性は高いと考えられる。

10、11層では、イネのプラント・オパールは検出されたものの、量的にやや少ないと、上層の9層からプラント・オパールが落ち込んだことも考えられる。

12層（浅間Cテフラ層）でわずかに検出されたイネのプラント・オパールは、上層からの落ち込みと考えられる。

浅間Cテフラの下層（13、14層）からは、イネのプラント・オパールは全く検出されなかつた。ここではヨシ属の卓越が著しいことから、当時ここはヨシの繁茂する湿地であったものと推定される。

以上のことから、同地点では浅間Cテフラの堆積後に稲作が開始され、9層の時期まで継続してイネが生産されたものと推定される。なお、他の地点でFP下層からイネのプラント・オパールが検出されていることから、当調査区における稲作の開始時期は、浅間Cテフラ（4世紀前半）以降—FP（6世紀中葉）の間と考えられる。

その後、8層（浅間Bテフラ直下層）の時期には、何らかの原因で水田が放棄され、そこにヨシが侵入して繁茂したものと考えられる。また、浅間Bテフラの堆積後も、しばらくは稲作が再開されなかつたものと推察される。

浅間Bテフラの堆積を境に、ヨシ属が見られなくなりタケ亜科が増加していることから、地下水位の変動などによって、温潤な土壤条件へ移行したものと推定される。

その他の地点についても同様に検討を行ない、各層で検出されたイネのプラント・オパール密度を、○□△×の4段階に区分して図45に示した。

上述のように、イネのプラント・オパール密度が5,000個/cc以上（○）の場合にイネが生産されていた可能性が高いと判断している。また、密度が2,000個/cc未満（△×）と特に低い場合は、イネが生産されていた可能性はほとんど考えられない。

以下に、各層における稻作の可能性と範囲について考察した。

(1)浅間Cテフラの下層（第45図-1）

調査区内で浅間Cテフラが見られたのは7地点である。分析の結果、同テフラの下層からはイネのプラント・オパールは全く検出されなかった。各地点ともヨシ属が卓越していることから、当時ここはヨシの繁茂する湿地であったものと推定される。

(2)FPの下層（第45図-2）

調査区内でFPが見られたのは4地点であるが、いずれも純層ではなく土層中に散在した状態で確認された。このうち135-125、140-125地点ではイネのプラント・オパールが5,000個/cc以上検出された。このことから、FPの堆積以前にここでイネが生産されていた可能性は大きいと考えられる。

(3)浅間Bテフラ直下層の下層（第45図-3）

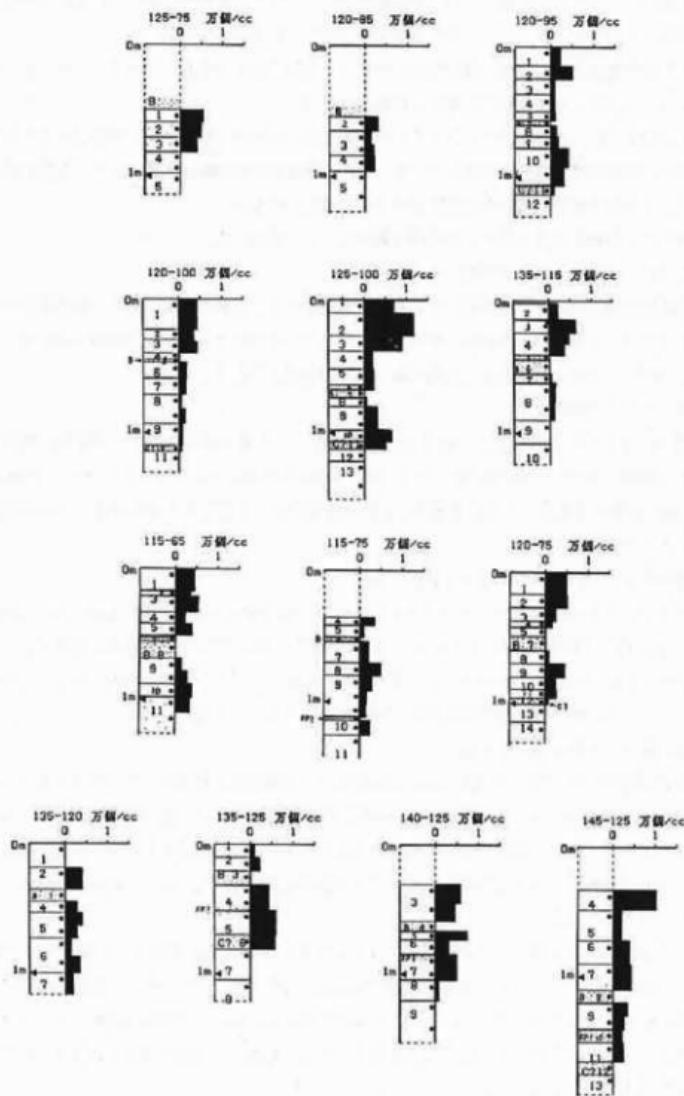
ここで、イネのプラント・オパールが5,000個/cc以上検出されたのは、115-75、135-125地点の2地点である。また、115-65、120-75、125-100、135-120地点の5地点では、量的にはやや少ないものの、イネのプラント・オパール密度のピークが形成されている。このことから、これらの地点でイネが生産されていた可能性は大きいと考えられる。

(4)浅間Bテフラ直下層（第45図-4）

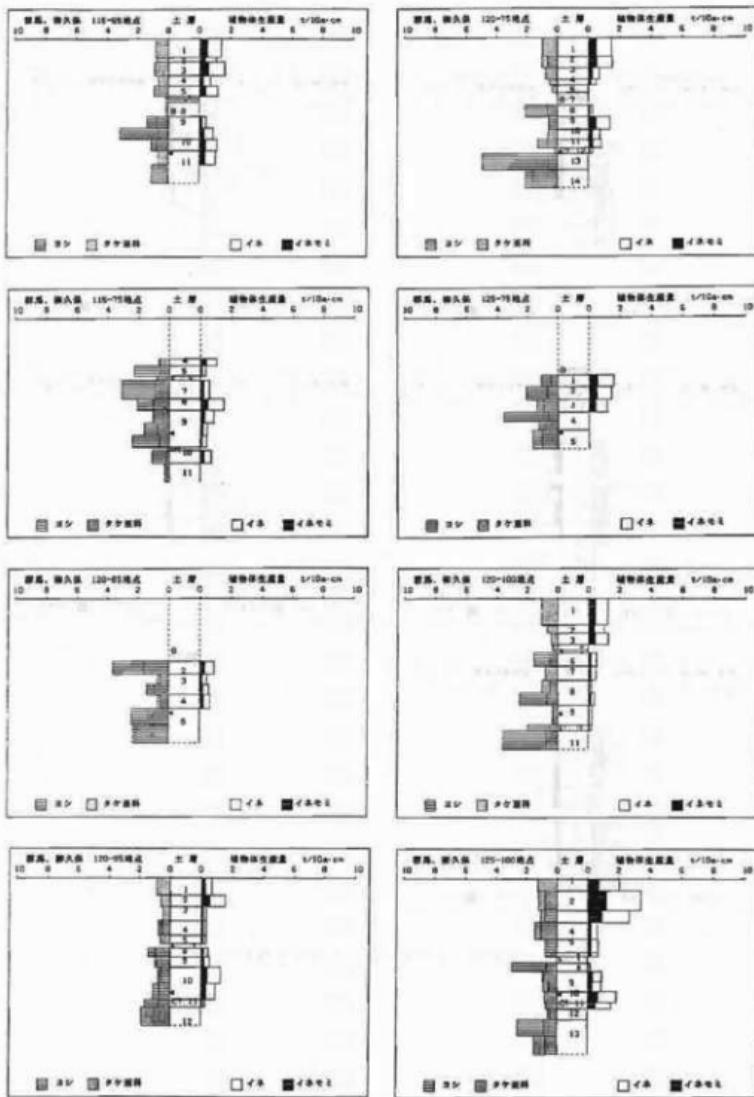
調査区北側の14区は発掘調査により浅間Bテフラの直下面が検出されていたところである。ここでイネのプラント・オパールが5,000個/cc以上検出されたのは、125-75地点の1地点だけであった。その他の地点では、イネのプラント・オパールは検出されたものの2,000個/cc未満と量的に少ない。このことから、同層でイネが生産されていたのはごく限られた区域であったものと考えられる。

調査区南側の16区でイネのプラント・オパールが5,000個/cc以上検出されたものは、140-125地点の1地点であった。また、隣接する135-120、135-125、145-125の3地点では、3,000個/cc以上のイネのプラント・オパールが検出されている。上層の浅間Bテフラを通してプラント・オパールが落ち込んだことは考えられないため、この周辺でイネが生産されていた可能性は大きいと考えられる。

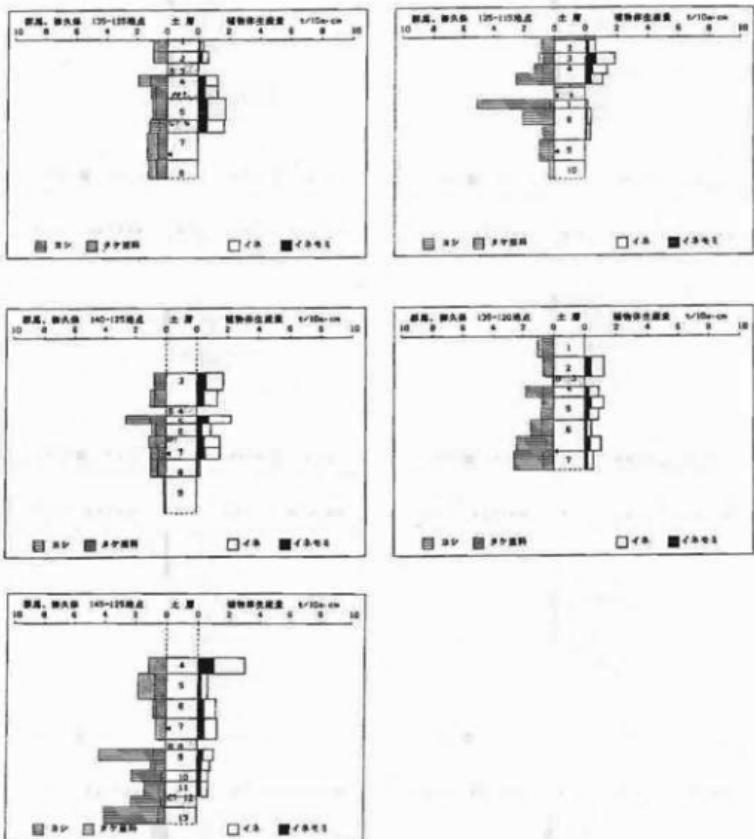
上記以外の地点では、イネの減少とともにヨシ属の増加が著しい。このことから、何らかの原因で水田が放棄され、そこにヨシが侵入して繁茂したものと推定される。



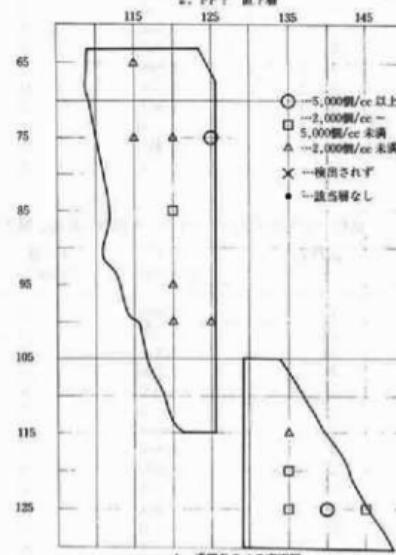
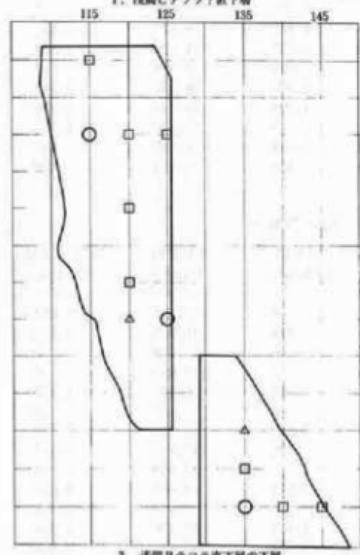
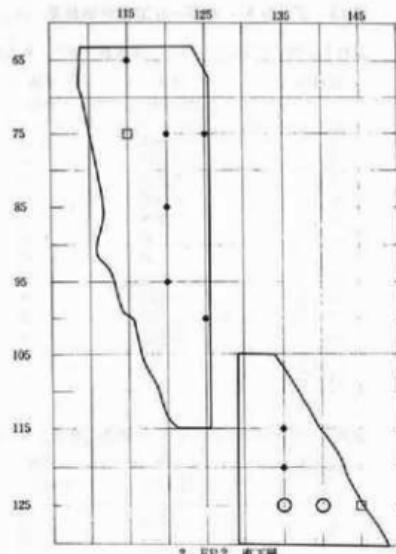
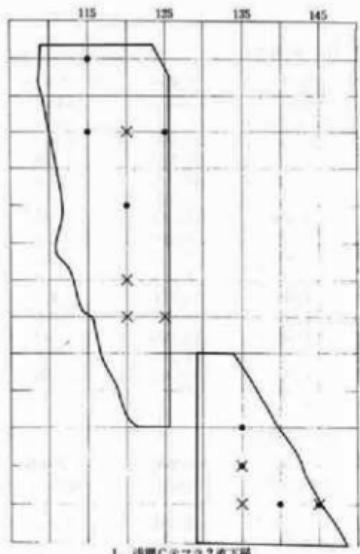
第42図 イネ根動細胞プラント・オ'パール出現状況



第43図 各植物の推定生産量と推移(1)



第44図 各植物の推定生産量と推移(2)



- ... 5,000個/cc 以上
- ... 2,000個/cc ～
- ... 5,000個/cc 未満
- △ ... 2,000個/cc 未満
- × ... 検出されず
- ... 適当なし

第45図 イネ機動細胞プラント・オパールの密度と分布

表13 プラント・オパール定量分析結果 (1)

試料 1cc 当り プラント・オパール個数 (群馬、柳久保 115-65 地点)

試料名	イネ (O. sati.)	キビ族 (Pani.)	ヨシ属 (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andro.)
1	4,684	0	0	17,566	5,855
2	3,643	0	0	15,787	2,429
3	5,470	0	0	18,598	0
4	2,360	0	0	12,981	0
5	3,928	0	1,309	11,783	2,618
6	0	0	0	3,811	0
7	0	0	0	0	0
8	0	0	0	2,371	0
9-1	1,475	0	1,966	16,714	1,475
9-2	2,919	0	4,587	12,927	2,085
10	3,855	0	1,542	16,190	1,542
11-1	3,528	0	0	13,229	0
11-2	0	0	1,591	5,568	795

試料 1cc 当り プラント・オパール個数 (群馬、柳久保 115-75 地点)

試料名	イネ (O. sati.)	キビ族 (Pani.)	ヨシ属 (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andro.)
4	3,574	0	0	14,294	1,191
5	1,094	0	3,283	12,039	0
6	0	0	1,165	3,495	0
7	1,986	0	4,469	18,870	2,483
8	5,052	0	3,032	21,726	2,526
9-1	2,998	0	1,499	8,994	0
9-2	1,578	0	2,367	16,567	3,945
9-3	1,403	0	3,508	13,331	2,806
F P ?	0	0	0	2,716	1,358
10	2,451	0	1,634	4,085	409
11	0	0	420	5,463	420

試料 1cc 当り プラント・オパール個数 (群馬、柳久保 120-75 地点)

試料名	イネ (O. sati.)	キビ族 (Pani.)	ヨシ属 (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andro.)
1	5,033	0	0	20,133	2,013
2	5,268	0	878	21,072	3,512
3	2,404	0	0	15,228	0
4	1,768	0	0	10,609	0
5	0	0	0	6,946	1,158
7	0	0	0	0	0
8	868	0	3,038	13,886	1,736
9	4,681	0	780	12,482	3,121
10	2,575	0	0	12,016	858
11	2,773	0	1,849	13,865	4,622
12	894	0	0	3,576	1,788
13	0	0	7,141	12,496	5,356
14	0	0	3,089	33,983	1,030

表14 プラント・オパール定量分析結果 (2)

試料1cc当りプラント・オパール個数 (群馬、柳久保 125-75地点)

試料名	イネ (O. sati.)	キビ族 (Pani.)	ヨシ属 (Phrag.)	タケ亞科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andro.)
1	5,367	0	1,534	9,968	767
2	4,969	0	2,982	14,908	2,982
3	4,025	0	2,012	19,117	7,043
4-1	0	0	5,150	13,389	4,120
4-2	0	0	1,795	17,050	2,692
5	0	0	2,424	21,813	4,847

試料1cc当りプラント・オパール個数 (群馬、柳久保 120-85地点)

試料名	イネ (O. sati.)	キビ族 (Pani.)	ヨシ属 (Phrag.)	タケ亞科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andro.)
2	3,148	0	5,246	33,574	3,672
3-1	1,535	0	768	14,586	768
3-2	2,029	0	2,029	18,938	676
4	2,318	0	773	14,683	773
5-1	0	0	3,486	27,892	3,486
5-2	0	0	3,319	43,146	5,532

試料1cc当りプラント・オパール個数 (群馬、柳久保 120-95地点)

試料名	イネ (O. sati.)	キビ族 (Pani.)	ヨシ属 (Phrag.)	タケ亞科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andro.)
1	2,314	0	0	18,509	0
2	5,243	0	0	12,582	3,146
3	1,096	0	0	9,868	2,193
4	1,110	0	1,110	11,097	1,110
5	1,192	0	0	13,114	1,192
7	0	0	0	0	0
8	1,549	0	2,066	19,624	2,066
9	1,875	0	1,406	17,340	2,343
10-1	4,190	0	838	15,923	1,676
10-2	3,124	0	1,562	14,837	3,124
11	781	0	2,343	15,620	3,124
12	0	0	0	38,212	3,275

試料1cc当りプラント・オパール個数 (群馬、柳久保 120-100地点)

試料名	イネ (O. sati.)	キビ族 (Pani.)	ヨシ属 (Phrag.)	タケ亞科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andro.)
1	4,282	0	0	21,410	0
2	3,575	0	0	14,302	0
3	4,330	0	0	8,659	3,247
4	0	0	0	7,058	0
5	0	0	0	0	0
6	1,796	0	2,245	10,777	449
7	1,665	0	0	16,649	2,081
8-1	697	0	697	20,909	3,485
8-2	1,434	0	3,584	15,054	4,301
9	913	0	456	6,391	913
10	703	0	2,810	10,539	1,405
11	0	0	5,226	15,679	871

表15 プラント・オバール定量分析結果 (3)

試料1cc当りプラント・オバール個数 (群馬、栃久保 135-125地点)

試料名	イネ (O. sati.)	キビ族 (Pani.)	ヨシ属 (Phrag.)	タケ亞科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andro.)
1	1,112	0	0	18,898	2,223
2	2,251	0	0	19,133	2,251
3	0	0	0	0	0
4-1	4,331	0	2,707	23,281	2,707
4-2	4,456	0	1,485	16,340	2,228
5	6,135	0	1,363	15,679	0
6	5,775	0	1,650	11,550	2,475
7	0	0	907	27,195	2,720
8	0	0	1,042	25,003	4,167

試料1cc当りプラント・オバール個数 (群馬、栃久保 140-125地点)

試料名	イネ (O. sati.)	キビ族 (Pani.)	ヨシ属 (Phrag.)	タケ亞科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andro.)
3-1	5,798	0	1,160	16,235	0
3-2	4,530	0	1,132	21,516	1,132
4	0	0	0	0	0
5	7,570	0	3,785	22,079	3,154
6	3,122	0	1,041	19,252	2,602
7-1	5,051	0	0	23,091	3,608
7-2	5,063	0	723	20,973	2,170
8	775	0	775	20,927	775
9-1	0	0	0	2,960	0
9-2	0	0	0	1,361	0

試料1cc当りプラント・オバール個数 (群馬、栃久保 145-125地点)

試料名	イネ (O. sati.)	キビ族 (Pani.)	ヨシ属 (Phrag.)	タケ亞科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andro.)
4	10,164	0	0	23,716	3,388
5	2,146	0	1,073	37,546	1,073
6	3,926	0	981	17,665	2,944
7	4,315	0	0	13,807	0
8	0	0	0	0	0
9-1	3,486	0	6,275	16,733	1,743
9-2	2,803	0	1,401	14,014	1,869
10	2,345	0	3,127	6,254	0
11	2,441	0	1,953	8,786	976
12	0	0	3,200	6,400	4,000
13	0	0	5,733	9,828	0

表16 プラント・オバール定量分析結果 (4)

試料1cc当りプラント・オバール個数 (群馬、栃木保 125-100地点)

試料名	イネ (O. sati.)	キビ族 (Pani.)	ヨシ属 (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andro.)
1	6,988	0	0	25,621	3,494
2	11,612	0	1,161	25,546	1,161
3	9,057	0	1,132	21,510	2,264
4	2,073	0	2,073	21,762	0
5	2,220	0	1,110	12,209	3,330
6	2,209	0	1,104	7,730	2,209
7	0	0	0	0	0
8	530	0	4,242	14,849	1,061
9-1	3,143	0	1,347	18,408	449
9-2	3,026	0	757	18,157	3,026
10	6,432	0	0	16,081	0
11	5,054	0	0	14,439	1,444
12	0	0	658	11,850	1,317
13-1	0	0	3,735	17,739	934
13-2	0	0	1,053	30,544	2,106

試料1cc当りプラント・オバール個数 (群馬、栃木保 135-115地点)

試料名	イネ (O. sati.)	キビ族 (Pani.)	ヨシ属 (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andro.)
2	2,159	0	1,080	18,353	0
3	6,309	0	1,051	21,030	2,103
4-1	4,611	0	1,844	16,598	0
4-2	3,625	0	3,625	15,407	1,813
5	0	0	0	0	0
6	0	0	0	0	0
7	505	0	7,319	6,057	505
8-1	1,213	0	3,034	12,134	0
8-2	1,073	0	1,073	11,799	1,073
9	0	0	1,406	7,735	0
10	0	0	0	7,373	0

試料1cc当りプラント・オバール個数 (群馬、栃木保 135-120地点)

試料名	イネ (O. sati.)	キビ族 (Pani.)	ヨシ属 (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andro.)
1	0	0	1,093	21,869	0
2	4,165	0	1,041	14,577	1,041
3	0	0	0	1,180	0
4	2,995	0	2,621	14,603	749
5-1	4,111	0	0	15,271	587
5-2	2,990	598	1,196	17,341	0
6-1	1,442	0	2,163	16,583	2,884
6-2	3,478	0	3,478	10,433	1,391
7	1,875	0	3,750	14,626	1,500

II 柳久保遺跡出土の果核

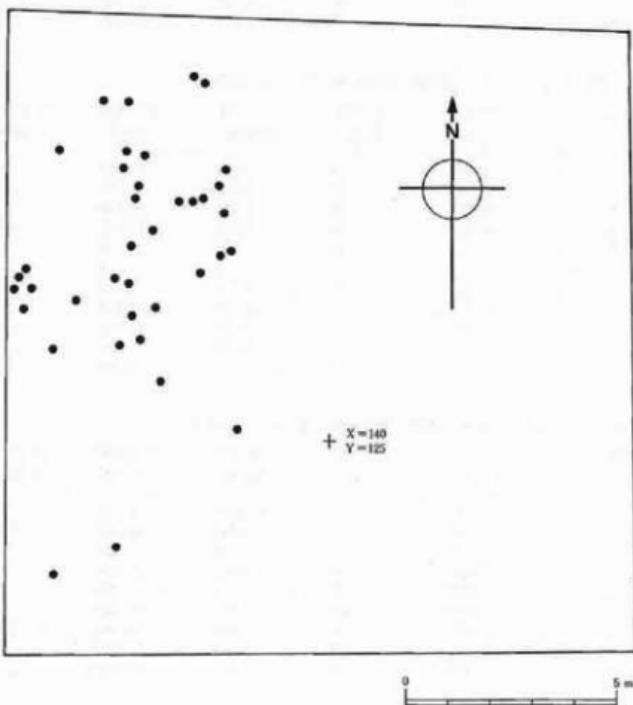
果核は36点あり、うち2点はオニグルミ、残りはすべてモモである。

オニグルミ *Juglans mandshurica* subsp. *Sieboldiana*

長さ32.0~29.8mm、幅24.6~28.2mm、長さの割に幅の少ない個体とやや円形に近い個体とである。オニグルミの核はきわめて変化に富んでいる。

モモ *Prunus persica*

核の大きさは、30.4~19.5mm、幅29.3~22.8mmの範囲にある。厚さは特に計測しなかったが、古代の出土桃の核と同様に、かなりの厚みを持っている。これまでの各地の遺跡から出土した桃と変わらない。これらのうち2個体は齧歯類のかじった跡が残されている。



第46図 柳久保遺跡（第16地点）果核出土状況

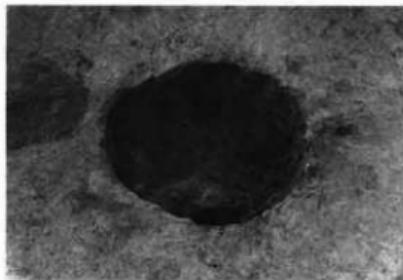
写 真 図 版



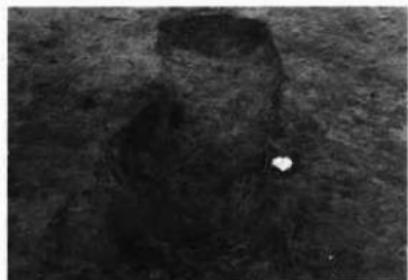
1. 確認全景



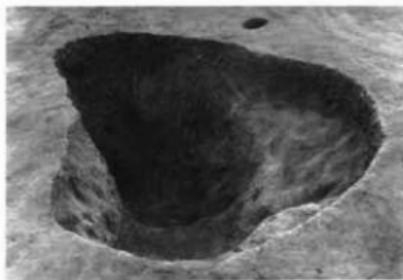
2. 表土耕土



3. 1号土塚



4. 2号土塚



5. 3号土塚

図版 2

柳久保遺跡(第10地点)



1. 終了全景



2. 先土器・縄文時代試掘坑



3. 先土器・縄文時代試掘坑



4. 遺構外出土遺物

下鶴谷遺跡(第13地点)



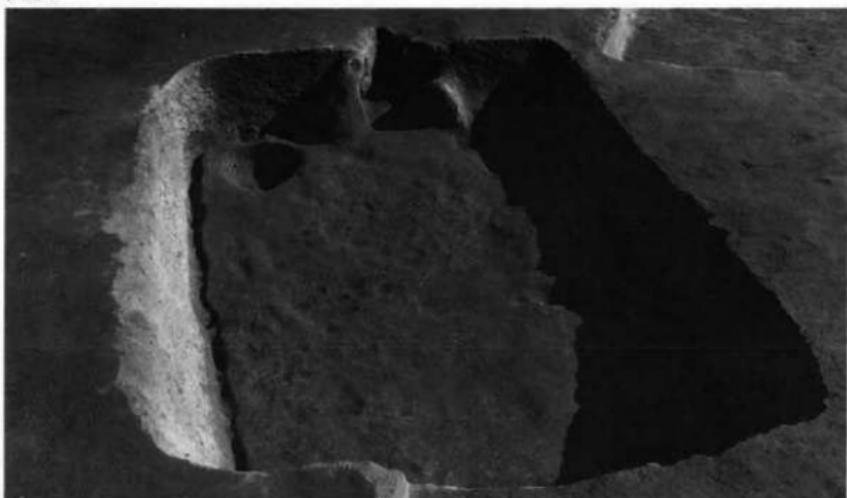
1. 表土排土終了全景



2. 確認全景

図版 4

下鶴谷遺跡(第13地点)



1. 1号住居址



2. 1号住居址 断面

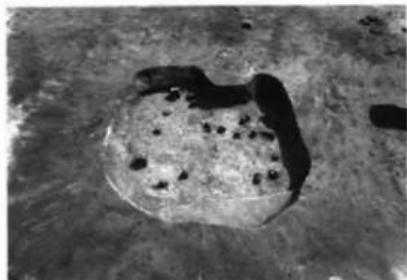


3. 1号住居址 カマド



4. 1号住居址 カマド

下鶴谷遺跡(第13地点)



1. 2号住居址



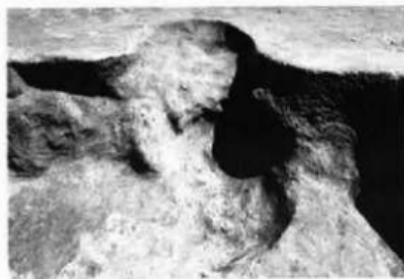
2. 2号住居址遺物出土状況



3. 2号住居址



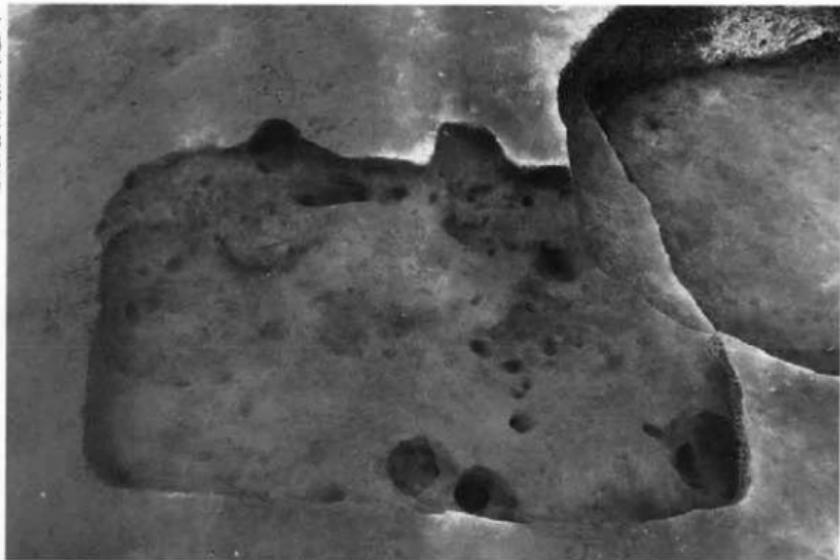
4. 2号住居址



5. 2号住居址 カマド

図版 6

下鶴谷遺跡(第13
地点)



1. 3号住居址



2. 3号住居址 第1カマド



3. 3号住居址 第2カマド



4. 4号住居址 断面



5. 4号住居址 カマド



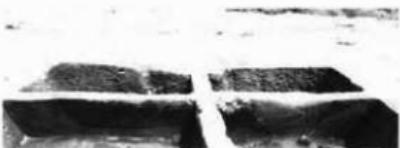
1. 4号住居址



2. 5号住居址

图版 8

下鶴谷遺跡(第13地點)



1. 5号住居址 断面



3. 5号住居址



5. 5号住居址 カマド



7. 5号住居址 カマド



2. 5号住居址遺物出土状況



4. 5号住居址



6. 5号住居址 カマド



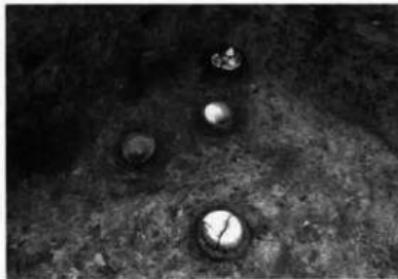
8. 5号住居址 カマド



1. 6号住居址



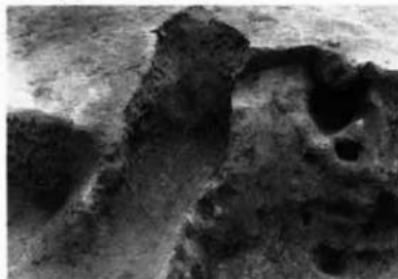
2. 6号住居址遺物出土状況



3. 6号住居址遺物出土状況



4. 6号住居址



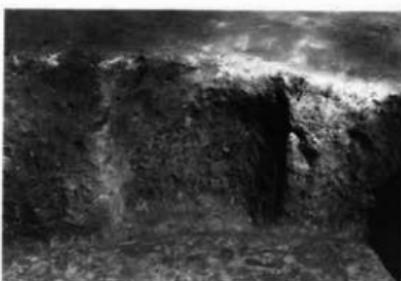
5. 6号住居址 カマド

図版10

下鶴谷道路(第13地点)



1. 7号住居址 断面



2. 7号住居址 旧カマド



3. 7号住居址 新カマド



4. 7号住居址 新カマド

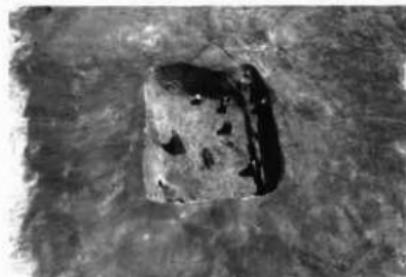


5. 7号住居址

下総谷遺跡(第13地点)



1. 7号住居址 新カマド



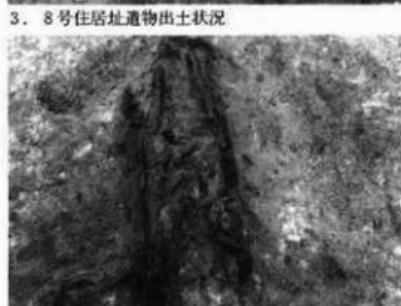
2. 8号住居址



3. 8号住居址遺物出土状況



4. 8号住居址遺物出土状況



5. 8号住居址炭化材出土状況

下鶴谷遺跡(第13
地点)



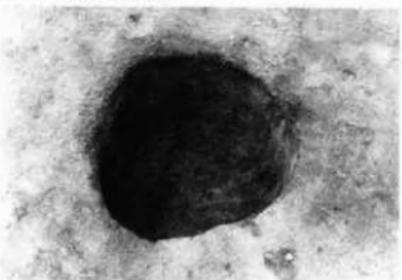
1. 8号住居址



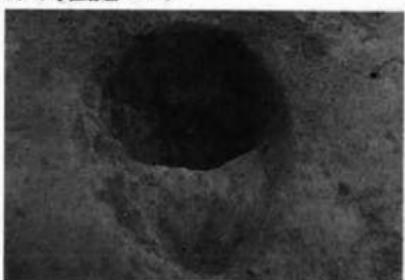
2. 8号住居址 カマド



3. 8号住居址 カマド



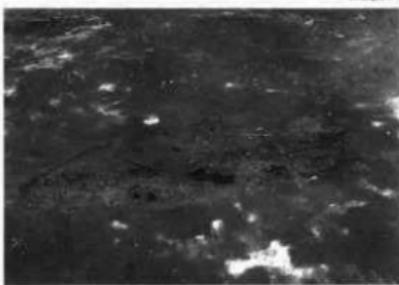
4. 1号土壙



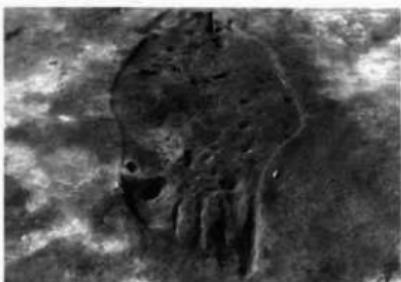
5. 2号土壙



1. 1号炭窑 碳化



2. 1号炭窑 碳化材出土状况



3. 1号炭窑 完掘



4. 2号炭窑 碳化



5. 2号炭窑 碳化材出土状况



6. 2号炭窑 完掘



7. 3号炭窑 碳化材出土状况



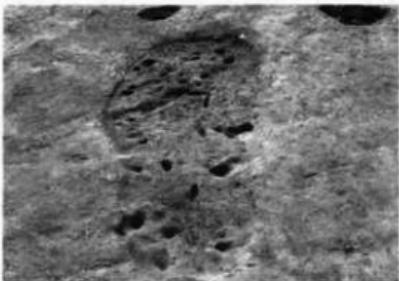
8. 3号炭窑 完掘

图版14

下魏谷遺跡(第13地點)



1. 4号炭窯 炭化材出土状況



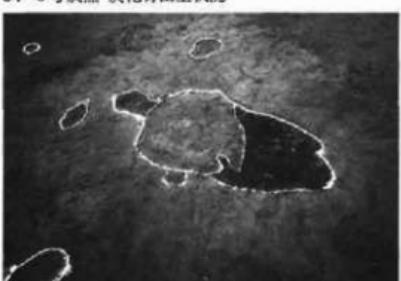
2. 4号炭窯 完掘



3. 5号炭窯 炭化材出土状況



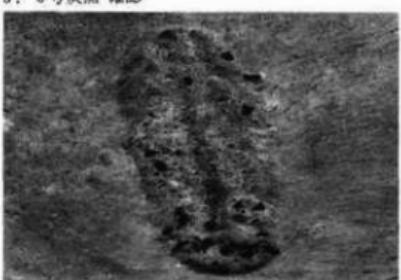
4. 5号炭窯 完掘



5. 6号炭窯 確認



6. 6号炭窯 完掘



7. 7号炭窯 炭化材出土状況



8. 7号炭窯 完掘

下鶴谷遺跡（第13地点）



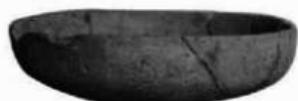
1. 上面終了全景



2. 下面終了全景

圖版16

下鶴谷遺跡(第
13地點)



1号住2



1号住12



1号住6



1号住13



1号住8



1号住14



1号住9



1号住11



1号住15

1号住居址出土遺物(1)

下鶴谷遺跡(第13地点)



1号住17



1号住18



1号住居址出土遺物(2)

1号住19

图版18

下姚谷道路第13地点



1号住20



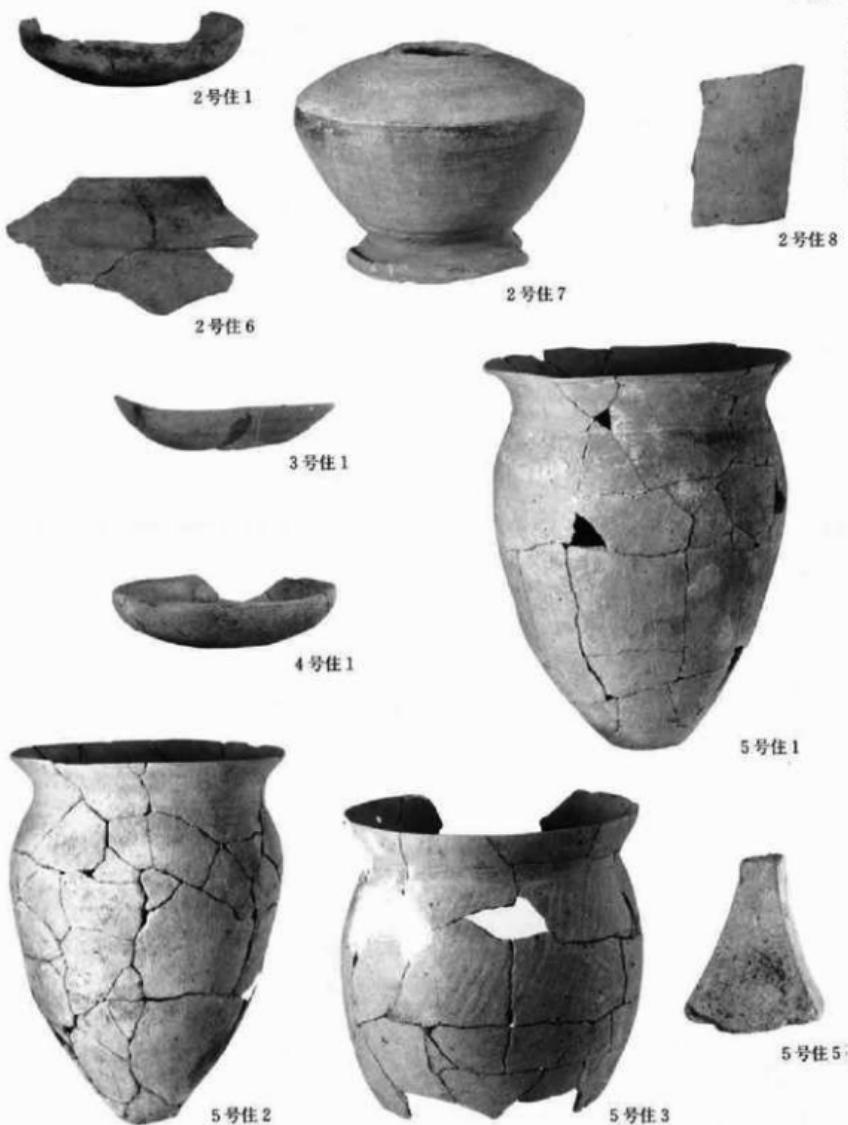
1号住21



1号住22

1号住居址出土遗物(3)

下鹤谷遗址(第13地点)



2·3·4·5号住居址出土遗物

图版20

下鹤谷遗址 第13地点



6号住1



6号住2



6号住3



6号住4



6号住5



6号住6



6号住7



6号住8



7号住1



7号住2



7号住3



8号住1



8号住2



8号住3



8号住4



2号土坡

6·7·8号住居址·2号土坡出土遗物

梅久保遺跡(第14・16地点)



1. (第14地点) 調査前



2. (第14地点) 調査前



3. (第14地点) 調査風景



4. (第14地点) 調査風景



5. (第14地点) 調査風景



6. (第14地点) 調査風景



7. (第14地点) 南側水没状況



8. (第14地点) 南側水没状況

図版22

柳久保遺跡第14・
16地点



1. (第14地点) 終了風景



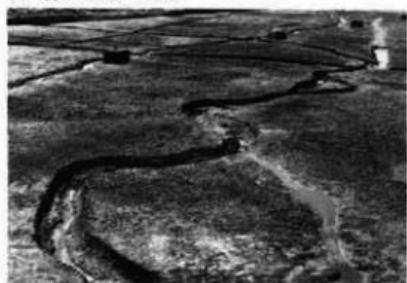
2. (第16地点) 終了風景



1. (第14地点) 1号溝



2. (第14地点) 2号溝 断面



3. (第14地点) 右2、左3号溝



4. (第14地点) 3号溝 断面



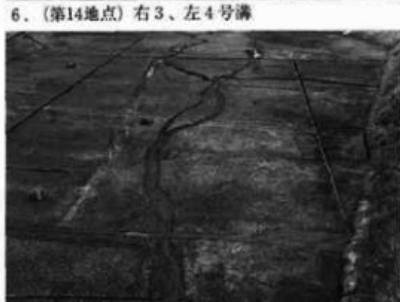
5. (第14地点) 3号溝遺物出土状況



6. (第14地点) 右3、左4号溝



7. (第14地点) 4号溝



8. (第14地点) 4号溝

柳久保遺跡
第14・
16地點



1. (第14地点) 5号溝



2. (第14地点) 6号溝



3. (第14地点) 右側



4. (第16地点) 土壙



5. (第16地点) A区 7号溝



6. (第16地点) A区 8号溝断面



7. (第16地点) B区遺物出土状況



8. (第16地点) B区出土遺物

柳久保遺跡群
印 刷 昭和62年3月25日
発 行 昭和62年3月27日
編 集 山武考古学研究所
発行者 前橋市教育委員会
前橋市埋蔵文化財発掘調査団
印刷所 桜文化総合企画
T E L 0476-24-1563

